
本と勇気と演劇部

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本と勇気と演劇部

【Nコード】

N77410

【作者名】

まあ

【あらすじ】

『サドで邪悪な召喚獣』の番外編です。

理音、明久の小学校時代の友人『本宮 葵』。

彼女は小説家を目指しているが、自分に自信が持てない。

お馴染みのFクラスの面々と前田兄弟は彼女の背中を押して上げられるのでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』でも完結済みです。

オリキャラデータ

オリキャラプロフィール

モトミヤ アオイ
本宮 葵

所属クラス 2 - B

性別 女

備考

理音、明久、瑞希と同じ小学校の卒業。理音と明久とは顔見知りだったが、瑞希とは面識がない。

内向的な性格で、人と話す事は苦手。趣味は物語を書く事で将来の夢でもあるが、自分に自信がなく、その性格のためか両親には言い出せずにいる。

友人は少なくクラスの女子からは軽く無視をされてる。

理音曰わく、メガネっ娘の巨乳。その破壊力は瑞希をも上回る。

予習問題（前書き）

サドで邪悪な召喚獣番外編。第3弾です。

第1弾は更新停滞中。（爆笑）

理音と明久の過去はこの作品で部分的に書かれるかもしれませんが。

予習問題

「お願いします。返してください」

空が赤く染まり始める頃、少女はノートの片隅に書いた小さな物語をクラスのいじめっ子グループに取り上げられ、今にも泣き出しそうな瞳で返して欲しいと言うが、

「こいつ、バカじゃねえの。見ろよ。白馬に乗った王子様とかずいぶんとメルヘンチックなもの書いてよ」

「こいつあれだろ。夢は小説家さんになりたいです。とか言うんだよな。こんなくそつまねえ話しか書けねーのによ」

いじめっ子グループのうちの2人が少女が書いた物語を読んでバカ笑いをすると、

「夢なんて、見るなよ。そうだ。優しい僕たちが現実つてものを教えてあげるよ」

1人の少年が悪気など微塵もなさそうな笑顔で少女のノートを破こうとし、

「だめえ!!!!!!」

少女は大声を出してその少年からノートを取り戻そうとするが、少女の腕力では取り返す事などできず、

「あつたまきた。冗談のつもりだったのに、本気でこんなくそつま

んねえ話破ってやる」

少女の反撃を喰らった少年は本気で少女のノートを破ろうとした時、
「なにやってんだよ。女の子のノートを破こうとするなんてサイテ
ーだよ!」

「アキ、面倒な事に首を突っ込むなよ。バカはああやって自分を人
より優位な位置に持っていきたいんだから」

少し頭の悪そうな少年と一見、少女と見間違えるくらいにかわいい
少年が教室に入ってくる。

「ちよつと、リオ、一人で帰ろうとしないでよ。女の子のピンチな
んだよ」

「興味ない」

少年の1人はいじめになど興味がなさそうに欠伸をすると廊下を出
ようとするが、もう1人の少年が彼の腕をつかみ。

「いじめっこなら、多少ケガさせても問題ないって、だから、ボク
じゃなくてあいつらで実験しなよ」

「ほう……」

帰ろうとしている少年は友人の一言でニヤリと笑うと、

「お前らはいじめられる立場がわからないから、そいつをいじめる
んだな。なら、俺がいじめられるやつを立場を教えてやるう」

懐から花火を取り出し、少女をいじめていた少年達を笑顔で撃ち抜いて行く。

これがわたし、本宮葵と前田理音くん、吉井明久くんとの出会いでした。

予習問題（後書き）

どうも、作者です。

内向的な少女。本宮葵が今回の主人公です。

理音や明久の昔の友人が主人公ですが、存在感は薄い。（爆笑）

第1問

(……懐かしい夢だったな)

葵は授業中に昨日の夢を思い出す。

(前田ちゃんと吉井くん、元気にしてるのかな？ 前田くんは小学校卒業と同時に留学、吉井くんは文月学園にいるみたいだけど、別の中学校に進んだから、疎遠になっちゃうし)

葵は幼い頃に仲良くなった男の子2人の顔を思い浮かべて、くすりと笑うと、

「本宮さん、この問題を解いてください」

「は、はい！？ ……すみません。聞いていませんでした」

その様子を見ていた教師に名指しで問題を解けと言われると、葵は慌てて立ち上がった後、小さくなって聞いていなかった事実を告げる。

「……まったく、本宮さん、授業をしつかりと聞いていてください。確かに今の季節、日差しが暖かいので眠くなる気持ちもわかりますが、授業に集中しないとまたFクラスに遅れを取る事になりますよ」

どうやら、授業を上の方で聞いていたのは葵だけではなかったようで、教師は春の陽気に負けてはいけないと教室の生徒全員に言う。

「本宮さん、座って良いです。それでは……」

教師は葵に向かい座れと言った後、葵の事など気にもかけずに授業を再開していくなか、

「本宮のヤツ、何やってんだよ。あいつが授業を聞いてなかったから、また、Fクラスに負けたと言われたじゃねえか」

「ホントだよ。授業を真面目に受けるくらいしか取り柄がないような地味娘なんだからそれくらいはやれよな」

「……」

葵はクラスメート達の冷たい視線に居心地の悪さを感じながら自分の席に座り、

(……)

気分を代えたいと思ったのか、机の中から一冊のノートを取り出し、真剣な表情でノートに何かを書き始める。

第2問

(……みんな帰っちゃったから、遅くなっちゃった)

葵は今日は教室の掃除当番だったため、掃除をしていたが、クラスメート達は葵に掃除を押し付け、彼女1人を残して帰ってしまった。

(……どうして、わたしはこんななんだろう?)

葵は自分の鞆を持ち、廊下に出ると言いたい事もはつきりと言う事ができない自分の性格に嫌気がさしているようで瞳に涙がにじみ始めた時、

「ん？」

「ふえっ!？」

葵の姿を見た1人の男子生徒が葵に興味を持ったようで葵の肩をいきなりつかみ、葵は男子生徒に肩をつかまれた事でバランスを崩して床に倒れ込む。

「……白か」

「!？」

男子生徒は床に倒れた葵のスカートの中をしっかりと見たようで、ぼそりとつぶやくと葵は慌ててスカートを押さえるが、男子生徒に何も言えずに顔を赤くしてうつむいてしまう。

「り、理音、お主は何をしておるのじゃ！？ お主、大丈夫か？
ケガは？」

葵と男子生徒の様子を見ていた男子生徒の友人が葵に駆け寄り、葵に手を貸そうとするが、

「だ、大丈夫です。わたし、これで失礼します」

葵は慌てて自分で立ち上がるとそう言い、廊下を走り出そうとするが、

「待て。本宮」

「え？」

自分を転ばせた男子生徒が葵の名前を呼ぶ。

「理音、お主の知り合いなのか？」

「ああ、小学校時代の友人だ。あの時より、いつそうと成長したようだな」

「……お主は少し言葉を選べんのか？」

葵が男子生徒に名前を呼ばれた事に意味がわからないと言った表情をしているなか、男子生徒は葵の胸に視線を集中させているのを見て、もう1人の男子生徒はため息を吐く。

第2問（後書き）

どうも、作者です。

理音と秀吉との遭遇です。

理音との再開が彼女にどう変化を与えるんでしょうか？

第3問

「えっ！？ えっ！？」

「本宮、何を戸惑っているんだ？ 落ち着くために俺特製の副作用ありの鎮静剤でも飲んでみるか？」

「……理音、久しぶりの再会なのじゃろ。お主の事が誰かわかっておらぬようじゃぞ」

葵は目の前の男子生徒に心当たりがないせいか、慌てながら首を傾げていると、葵の名前を呼んだ男子生徒は葵の様子を見て懷から怪しげな錠剤を取り出し、葵が表情を凍り付かせると、もう1人の男子生徒がため息を吐きながら、葵へ助け舟を出し、葵は男子生徒に心当たりがないため、こくこくと頷く。

「ん？ そうか。本宮はこの俺の事を忘れていたわけか。アキと言い本宮と言い冷たいヤツらばかりだな」

「そうは言っても、お主は昔との面影は皆無じゃから仕方ないと思うのじゃが」

（あれ？ この笑い方って、前田リオくん？）

男子生徒が笑うのを見て、葵はその笑顔に夢に見た幼い頃の友人の笑い方と目の前の男子生徒の笑い方が重なる。

「あの……間違ってたら、すみません。ひょっとして、前田理音くん？」

「ああ、そうだ。久しぶりだな。本宮」

葵は恐る恐る、男子生徒に聞くと男子生徒は葵の昔の友人の『前田理音』であり、理音は先ほどとは違った優しい表情で笑う。

「う、うそ!? い、いつ、この街に帰ってきたんですか?」

「ちよくちよく手続きとかで戻ってきてたが、正式に戻ってきたのは1週間前だ。しかし、本宮が文月にいるなんてアキからは聞いてなかったぞ。アキにはおしおきをしないといけないな」

「えーと、お手柔らかにしてあげてくださいね」

理音は葵の言葉に頷くとアキと言われる生徒に何かするつもりなのか邪悪な笑みを浮かべ、葵はそんな理音の様子に昔を思い出したように苦笑いを浮かべる。

「えーと、本宮で良いのじやろうか? ワシは木下秀吉じゃ。前田が迷惑をかけたようですまんのじゃ」

「本宮葵です。いえ、わたしは前田くんの突拍子もない行動には馴れてますから、気にしないでください。わたしこそ。心配をかけてしまい申し訳ないです」

もう1人の男子生徒が葵に向かい『木下 秀吉』と名乗ると葵も釣られて自分の名前を名乗る。

「……馴れているとはそれはそれで凄いのう」

「確かに、そうですね。でも、前田くん、変わってないですから」

葵と秀吉は理音の様子を見た後、顔を合わせて苦笑いを浮かべる。

第4問

「……何かバカにされてる気がするな」

「そんなことは無いですよ。わたしは変わってない。前田くんに会えて嬉しかったですから……」

理音は葵と秀吉が苦笑いを浮かべているのを見て、少し不機嫌そうな表情を見ると、葵は少し慌てた様子で理音に言っが言葉の途中で葵は言葉をつまらせる。

「何かあったのか？」

「何も無いですよ」

理音は葵の様子を見て葵に聞くが葵は笑顔で何もないとは答えるがその笑顔はどこか無理をしているように見える。

「……そうか？ まあ、本宮が話す気が無いなら、別に何も聞かないが、今のお前は俺とアキが初めてお前に会った時と同じ表情をしているぞ」

「！？」

葵の様子に理音は何かしら感じているようでそう言っ葵は表情を強ばらせる。

「……相変わらず、表情に出やすいヤツだな」

「そのようじゃの」

葵の表情の変化に理音がため息混じりで言うと、秀吉も同じように感じたようで理音の意見に同意を示す。

「まあ、久しぶりの再会だし、俺の事を警戒するのもわかるからな。気が向いたら話にこい」

「は、はい！？　で、でも、わたし、Aクラスになんか入っていけないですよ……」

理音は葵に向かい言う可她女は理音の言葉に声を裏返しながら返事をした後、理音がAクラスだと思っているため、小さな声で言う。

「俺はFクラスだ」

「……ど、どうしてですか!？」

しかし、葵の心配をよそに理音は自分がFクラスだと言うと葵は意味がわからずに声を裏返す。

「まあ、いろいろ会ってな……本宮、わるいな。俺はそろそろ行かないといけない時間だ。帰らせて貰う」

「は、はい!？」

「それじゃあ、また明日なのじゃ」

「ああ」

理音は用事があるようにで蔡と秀吉を置いて歩き出す。

第5問

「……まったく、あ奴は自分の言いたい事だけ言うてからに、姉上に文句を言われるワシの都合も考えて欲しいのじゃ」

「あはは」

秀吉は理音の背中を見送った後、理音から優子に言伝を頼まれていたよう、ため息を吐くと葵はそんな秀吉の様子に苦笑いを浮かべると、

「本当に前田くんが帰ってきたんだ。夢じゃないよね？」

理音がこの街に帰ってきた事がよほど嬉しいようで自分に言い聞かせるように言う。

「まあ、夢ではないのじゃ。しかし、明久を見ておると理音が帰ってきたのは悪夢のようにしか見えんのじゃが、お主はそうでもないようじゃの」

「！？」

葵の言葉は秀吉の耳にしっかりと入ったようで、秀吉は明久と葵の反応の違いに苦笑いを浮かべながら言う。葵の顔は徐々に赤く染まっ
って行き、

「……なるほどのう。理音の言う通り、本当に顔に出やすいのう。まあ、理音は自分の恋愛系となると明久並に鈍そうじゃから、気にしなくても良いと思うが……」

「ち、違いますよ!？ た、確かに前田くんはわたしの初恋の相手ですけ……ふえっ!？ ち、違います。今言った事はなしです!？ なしでお願いします!？」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべると葵は慌てて理音に恋愛感情はないと言おうとするが慌てているため、『理音が初恋の相手』だと言う事を暴露し、さらに慌てて行く。

「本宮、少し落ち着くのじゃ、別にワシはそんな事を言って回る趣味もないのじゃ。だから、心配する必要はないのじゃ」

「……ありがとうございます」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべたまま彼女に向かい優しく言い聞かせるように言くと、葵は秀吉のその表情に一瞬、きょとんとした後、大きく頭を下げる。

「そこまで感謝されても困るのじゃが……そろそろ、ワシも部活があるから行くが、本宮、お主はどうするのじゃ？」

「わ、わたしも帰ります」

「そうか。本宮、また明日なのじゃ」

「はい。木下くん」

秀吉は部活に行くために葵に別れを告げると葵は大きく頭を下げ、秀吉はその様子に少し困ったような笑みを見せた後、部室に向かい、

（わたしも帰ろう）

葵は秀吉と反対側に歩き始める。

第6問

「なあ、アキ」

「何？ リオ！？」

理音は登校してきた明久に声をかけると明久は理音の方を向くと理音から明久に向けて花火が飛び、

「いきなり、何をするんだよ！？」

「……ちっ」

明久は何とかギリギリで花火を交わし、理音はその様子に舌打ちをする。

「理音、お主は朝から何をしておるのじゃ？」

「秀吉か、昨日のお仕置きだ」

「ちょっと、昨日のお仕置きって何だよ！？　ボクは理音にお仕置きされるような事はしてないよ！？」

秀吉は2人の様子に呆れ顔で話しかけてくると理音は昨日、葵に言った明久のお仕置きを実行しようとしており、明久は意味がわからずに声をあげる。

「明久、お主、本宮葵と言う生徒を知っておるな？」

「本宮葵？……」

「アキ、お前のなかで友人とはあまり重要視されてないようだな」

「ちよっと、リオ、待ってよ。葵ちゃんだろ。わかってるよ。覚えてるから！？」

秀吉が苦笑いを浮かべながら、明久に葵の事を聞くが、明久は葵の事を覚えていないようで首を傾げると、理音は懷から怪しげな薬瓶を取り出し、明久はその薬瓶を見て顔を青くして言う。

「ほう。なら、言ってみろ」

「葵ちゃんだろ。ほら、ボクとリオが昔、助けて友達になった巨乳の女の子」

「……ちっ」

「明久は思い出したようじゃが、そこで判別するのはどうかと思うのじゃが」

明久は慌てて葵の事を話し、理音はお仕置きができなくなったため舌打ちをすると秀吉は苦笑いを浮かべたまま言う。

「それで、葵ちゃんがどうかしたの？」

「昨日、会ったんだ」

「そうなの。どこで？」

「学園でだ」

「えっ！？ 葵ちゃんも文月の生徒なの？」

明久は葵が文月にいる事を本当に知らなかったようで驚いたような表情をする。

第7問

「ああ、俺は一目で本宮だどわかったかが、お前は丸1年、同じ学園にいて本当に気づかなかったのか？」

「だってさ。中学は別のところ行っちゃったしさ。と言うか、リオが気づく方がすごいんだよ。リオこそ、よく覚えてたよね？」

理音が呆れ顔で明久に言う。明久は苦笑いを浮かべながら言う。

「まあ、俺はあれから変人扱いされてたから最終的にそばにいた奴らのは限られてたからな」

「……それもそうだね」

「それにな。当時もの凄い破壊力を秘めてたが、再会してさらに破壊力が向上していたんだ」

明久の質問に理音が答えると明久は少し表情を曇らせるが、理音は全く気にせずに話して行く。

「それは見てみたいね」

「……お主達はそこにしか目がいかんのか？」

理音の言う葵の1部分の成長具合に明久が真面目な表情をすると秀吉は呆れたようにため息を吐くが、

「秀吉、お前は気にならなかったのか？ あのたゆんたゆんを俺の

見立てでは瑞希を超える素材だ。男として、そこに目がいかないから、第3の性別とかわけのわからん事を言われるんだ」

「そうかの？」

「……………たゆんたゆん」

「ムツツリーニ!？」

理音が葵の胸の事を言い切ると話に聞き耳を立てていたのが康太は赤い液体を鼻から撒き散らし、明久は康太を抱きかかえ、周りに助けを求めている。

「アキ、会ったら声くらいかけておけ、あいつ、また、1人になってそうだからな」

「うん。葵ちゃんは自分から話しかけるの苦手だから、気にかけてみるけど、葵ちゃんって、何クラス？」

「聞いてなかったな」

「そうじゃな」

理音は彼なりに友人である葵を気にかけるが、どこか抜けている。

第7問（後書き）

どうも、作者です。

男の子な会話に呆れる秀吉。

理音の男の子な会話に秀吉は何かを感じるのでしょうか？

まあ、今回、美波が聞いてたら、明久は死んでたな。（爆笑）

第8問

(……お昼、どうしよう？ 購買は売り切れだし……)

葵はいつもお弁当を持参しているのだが、今日は朝、寝坊してしまい慌てていたため、お弁当を持ってくるのを忘れてしまい購買に行くが彼女はパンの1つも買えなかったようであめ息を吐く。

(学食は……今日はお昼抜きで良いや)

葵は学食を覗き込むが学食は昼食を取る生徒達でこった返しており、彼女には席を確保する事も、気軽に一緒と言ってくれる友人もないため、昼食を諦め教室に帰ろうとした時、

「本宮、こんなところで突っ立って、何かあったのか？」

「あつ！？ ホントだ。葵ちゃんだ」

「前田くんは吉井くん？」

両手に飲み物を抱えた理音と明久が葵に声をかける。

「久しぶり、葵ちゃん」

「はい。吉井くんもお久しぶりです」

葵と明久は再会に挨拶を交わし、

「本宮、こんなところで立ってどうかしたのか？」

「えーと、お弁当を忘れてしまいました。購買でパンを買おうと思っただけですけど……」

「その様子じゃ、買えなかったようだな。相変わらず、鈍いやつだ」
「す、すみません」

理音は葵に向かい、ため息混じりで言うと葵は申し訳なさそうに小さな声で答える。

「ちょっと、リオ。言い過ぎだよ。リオはあまりこないから、簡単に言うけど、お昼の購買は戦争何だからね」

「戦争なら、群がるヤツらを四散させれば良い」

「あっ！？ そうだね。今度、ボクが購買に行く時は手伝ってよ」

「いつになるかはわからんが、協力しよう」

明久の言葉に理音はその時の事を思い浮かべたのか、邪悪な笑みを浮かべて頷くが、

「ダ、ダメですよ！？ そんな事をしちゃ！？」

葵が顔を真っ青にして2人を止めに入る。

「あはは。さすがに冗談だよ。第一、リオが手伝ってくれたら、目的のパンも四散しちゃうからね」

「アキ、俺をナメるなよ。それくらい計算できない俺だと思っの
か？」

「うわ。どうしよう。めちゃくちゃ、リオに頼みたくなってきた」

「だ、だから、ダメで……くー」

葵は理音と明久を止めようとするが、タイミング悪く彼女のお腹の虫が悲鳴を上げ、葵は顔を真っ赤にする。

「あはは。かわいい音だね」

「い、言わないください」

「本宮、お前、昼はどうするつもりだ？」

「えーと、学食に」

「そうか。なら、ついてこい」

「えっ！？ えっ！？」

理音は葵の嘘に気づいたようでそう言うと、彼女を引っ張って歩き出し、

「あはは。葵ちゃんも変わってないな」

明久はその様子を見て、苦笑いを浮かべた後、2人を追いかけて行く。

第9問

「ただいま」

「遅いぞ。明久、理音……なあ、こいつはどうしたんだ？」

葵は理音に引きずられて2-Fクラスの教室に入ると、Fクラス代表の坂本雄二が2人を出迎えた後、理音の手に捕まれ小さくなっている葵を見て、首を傾げる。

「さっき、明久が購買で引っかけたんだ」

「何を言ってるんだよ。葵ちゃんを連れてきたのはリオだろ」

理音は何か思いついたようで邪悪な笑みを浮かべると、明久はため息混じりで理音の言葉を否定しようとするが、

「へえー、この子、誰？　うちらにもわかるように説明してくれる？」

「そうですね」

「ちょっと、美波に姫路さん！？　どうして、ボクに関節技を決めようとするの!？」

瑞希と美波は笑顔で明久の腕をつかむ。

「姫路、島田、止めんか。それで、明久、理音、どうして、本宮を連れてきたのじゃ？」

秀吉は葵と面識があるため、疑問を口にする、

「昼飯を食いつぱぐれそうだったからな」

「なるほどのう。本宮、いつまでも立ってないで座るのじゃ」

理音は簡単に葵を連れてきた理由を話し、秀吉は昨日と今の葵の様子を見て納得したようで頷き、葵に座るように言う。

「えーと、良いんですか？」

「理音と明久が誘ったんだろ。なら、遠慮なんてするな」

葵は知らない人から明久が関節技を決められているのを見て、怖いようで小さな声で確認すると、雄二は当たり前だと言い切り、

「それじゃあ。お邪魔します」

葵は小さくなりながら、理音と秀吉の間にちょこんと座る。

「おい。アキ、瑞希、島田、いつまでも遊んでるな」

「ちょっと、この状況を遊んでるの一言で片付けないでよ!？」

理音は葵が座ったのを見て、3人に向かい言っていると明久からは悲鳴混じりの返事が返ってくる。

第10問

「あの、前田くん、そろそろ止めた方が」

「流石は葵ちゃ……ぶほっ!？」

葵は明久が女子2人から間接技を受けているのを見て、少し怯えながら言うが、その一言で明久への攻撃はいつそう強まる。

「理音、そろそろ止める。飯の時間がなくなる」

「そうじゃのう」

雄二がため息混じりで言うと言秀吉は同意をし、

「仕方ないな。瑞希、島田、こいつが誰か説明するから、手を放せ」

理音はつまらなさそうに瑞希と美波に向かい言った時、「ピピピ」と言う本来、教室では聞くはずのない電子音が響く。

「炊けたみたいだな」

「炊けた?」

雄二はその音を聞き、当たり前のように炊飯器を開けると炊きたてのご飯をよそって行く。

「えっ!?! えっ!?!」

「本宮、うるさいぞ。ほら、飯だ」

「あ、ありがとうございます……って、違いますよ。何で、教室でご飯を炊いてるんですか!？」

「黙れ」

「……はい」

状況がわからない葵は今のありえない状況に驚きの声をあげるが理音に一括され、黙り込む。

「……理音、お主は説明もしておらんのか？」

「必要ない」

秀吉が葵の様子を見て、理音に言つと理音は一言で終わらせ、

「本宮、今日は焼き肉をしようと言つ話になっておるのじゃ」

「焼き肉ですか? ……焼き肉、教室で!？」

秀吉はため息を吐きながら、葵に説明をするが、学園での昼食ではありえないメニューに葵は驚きの声をあげ、

「うるさいぞ」

「はい……すいません」

理音に一括され、葵は小さくなる。

第11問

「……あの」

理音に一括され、葵が黙っていると目の前に用意されていたホットプレートに電源が入られ、クーラーボックスから出された牛肉が焼かれて行く。

「本宮、タレは甘口と辛口どっちが良い？」

「あ、甘口をお願いします」

「ほら」

「あ、ありがとうございます」

葵は目の前で繰り広げられている状況についていけずに顔をひきつけていると、

「理音の留学時代の知人から、大量に牛肉が送られてきたらしくてのう。食べきれんから、みんなでと言う事じゃ」

「で、ですけど、この状況にはつきませんよ!？」

「本宮、黙れ」

「は、はい!？」

秀吉が苦笑いを浮かべて葵にこの状況に至った経緯を説明するが、

葵が納得できるわけもなく声をあげるが三度、理音に一括される。

「あんまり、細かい事を気にしないで食ったらどうだ？ 昼休みは限られてるんだしな」

「で、ですけど、まだ、学園ですし、制服に匂いとかついちゃうし……くー」

雄二は焼き肉を口に運びながら葵に向かい言っと、葵は制服に匂いがつく事を気にしているが焼き肉の匂いに刺激されたようで彼女のお腹の無視は悲鳴をあげる。

「匂いなら気にしなくて良いみたいよ。前田の作った無害の消臭剤があるみたいだから」

「やっぱり、気になりますよね」

「はい。やっぱり、気になります」

明久を沈め終わったようで、瑞希と美波が葵に言っと、彼女は顔を赤くして頷く。

「無害は強調されるんだな」

「そのようじゃの」

「まったく、副作用のないもののどこが面白いんだ」

「……………面白い、面白くないの問題じゃない」

女子生徒3人はやはり、昼間の学園での焼き肉は抵抗があるようだが、瑞希と美波に沈められた明久以外の男子生徒4人は焼き肉の匂いなど気にせず食事を続けていく。

第12問

「理音、そろそろ、こいつの紹介してくれないか？」

「ん？ こいつは本宮葵。見ての通り、巨乳のメガネっ娘だ」

雄二は焼き肉を口に運びながら、理音に葵を紹介するように言うと、相変わらず、理音の葵の紹介は巨乳が主であり、

「……この子は本宮葵じゃ。明久と理音の小学校時代の友人だそうじゃ」

「も、本宮です」

秀吉は理音の紹介にため息を吐きながら、葵を紹介すると葵は慌てて頭を下げる。

「ん？ 明久と理音と同じ小学校なら、姫路とも知り合いじゃないのか？」

「瑞希とは同じクラスになった事は無いんじゃないか？」

「そうなの？」

「はい。無いと思います」

「そうですね」

雄二は葵と瑞希は面識がないのかと聞くと葵と瑞希はお互いに面識

がないようにで苦笑いを浮かべながら頷く。

「えーと、俺達も名乗った方が良いでしょう。Ｆクラス代表の坂本雄二だ」

「その妻の翔子です」

「翔子！？ 何でお前がここに！？」

雄二が葵に名乗るといつの間にか翔子が雄二の隣に座っており、葵に向かい頭を下げる。

「あっ！？ はい。お噂は聞かせていただいています。ご婚約なさっているって」

「来年の雄二の誕生日に籍を入れます」

「嘘を吐くな！？」

「雄二、うるさい」

「翔子、止める！？ 割れるうう！？」

葵は翔子に向かい頭を下げるなか、雄二は声をあげて否定すると翔子は雄二にアイアンクローを喰らわせる。

「……えーと？」

「気にするな。いつもの事だ」

葵が2人の様子に引きつった笑みを浮かべると理音は気にするなと言いつき、

「ウチは島田 美波。よろしくね」

「姫路 瑞希です」

「はい。よろしくお願いします」

雄二が翔子にアイアンクローをされているのはすでに日常になっているため、瑞希と美波も気にする事なく、自分の名前を名乗ると葵は改めて頭を下げ、

「康太、いつまでも本宮の胸を見てないで名乗れ」

「……………見てなどいない」

理音は葵の胸を凝視していた康太に言うと、康太は否定するが視線が逸れる事はない。

第13問

「えっ!？」

「……………土屋 康太」

葵は理音の一言に慌てて、自分の1部分を隠そうとするなか、康太は自分の名前を名乗る。

「素晴らしい素材だろ。本宮は着やせをするタイプなのにこのボリューム。俺の見立てでは、瑞希より、1・5311センチ上だ」

「……………1・5282」

「何!？ ……すまない。康太、計り損ねた」

「……………理音も良いとこまで行っている」

理音と康太の間で葵の胸の話になっているのを見て、葵は恥ずかしいようで耳まで真っ赤にしている。

「……………お主らは本人の前で何を言っておるのじゃ」

「そ、そうよ!! 胸の大きさですべてが決まるわけじゃないのよ!」

秀吉が理音と康太の様子にため息を吐くと美波は自分に言い聞かせるように叫ぶ。

「当たり前だ。形と感度も重要だ!!」

「……………理音の言う通り」

美波の言葉に理音が言つと康太は大きく頷く。

「……………本宮、理音と明久が誘ったとは言え、なんかいろいろとすまんのじゃ」

「いえ、木下くんは気にしないでください。実際はわたしが悪いわけですし、前田くんと吉井くんが誘ってくれなかったら、お昼抜きだったわけですし」

「それですけど、どうして…………」

「今日、寝坊して、お弁当を忘れてしまいました。購買に行ったんですけど、わたし、鈍いから1つもパンを買えなくて」

「そうなんですか。確かに購買は女の子にはつらいですね」

「はい…………」

ホットプレートの周りが混沌としているなか、葵、秀吉、瑞希の3人は緩い空気を出しながら焼き肉を食べる。

第14問

「ねえ。本宮さん」

「はい。何ですか？」

焼き肉を食べ始めてしばらくすると美波が葵に話しかける。

「アキと前田とどうして知り合ったの？」

「それは私も聞きたいです」

美波は葵が理音と明久の2人と知り合った時の事を聞きたいように葵に質問すると瑞希も聞きたかったようので便乗する。

「えーとですね」

「ん？ 本宮、どうかしたか？」

「理音、お主は相変わらずじゃの」

葵は2人の質問に昔の事を思い出しているのか、理音の顔をちらちら見ると理音は首を傾げ、秀吉は理音の様子にため息を吐く。

「ん？ 何がだ？」

「な、何でもないです。前田くんは気にしないでください！？」

葵は首を傾げている理音に向かい言つと、

「本宮さんの相手はアキじゃないみたいね」

「そうですね」

瑞希と美波は葵が明久狙いではないと感じたようで安堵の声をあげる。

「それで、結局、どうやって知り合っただ？」

「ん。別に変わった事などない。本宮が今のようになんて後ろ向きな態度をしていたから、イジメの対象になっていた。アキがそれをたまたま見かけてな。俺は巻き込まれた」

「ほう。明久にも良いところがあるのじゃな」

雄二が3人の出会いを改めて聞くと、理音は隠す必要性がないと思っ
ているようで『葵がイジメにあっていた事』をあっさりと話し、
秀吉が未だに落ちている明久を眺めながら頷く。

「吉井くんは昔から、優しかったですから」

「優しいと言うか、空気を読めないバカなだけだ。力もないのに1
人で突っ込むようなヤツだからな」

瑞希が頬を赤らめながら、明久を誉めるが、理音はその時の事を思
い出しているのか、呆れたようなため息を吐く。

「……………そんな明久を助けた理音も同類」

「……土屋の言う通り」

「そうかも知れませんか」

「……」

理音の態度に康太と翔子がうなづくと葵はクスクスと笑い、理音は微妙な表情をする。

第15問

「……別に助けた気はない。ただ、新しい火薬の実験台にちょうど良かっただけだ。あいつらがいなければ、アキを実験台にただけだしな」

理音は周りから言葉にどう言う反応をして良いのかわからないように不機嫌な口調で言うと、

「それなら、本宮まま、実験台にすれば良かったわけだろ？」

「それでも、かまわなかったが、それをやるとうるさいヤツがいたからな」

雄二は理音の様子に攻撃箇所を見つけたようでニヤニヤと笑いながら言うが、理音は未だに焼き肉にありつく事ができずに動かない明久を見てため息を吐く。

「確かに、吉井くんなら、そうしますね」

「バカな分、これと決めたら一直線だからな。面倒なんだ」

理音と瑞希は小学生時代の明久の事を思い出しているようで苦笑いを浮かべてる。

「……理音が、吉井に引きずられてるのは意外」

「そうね。今じゃ、前田がアキを引きずり回してる感じだもんね」

「確かにそうじゃの」

理音の話に翔子、美波、秀吉が言うが、

「そんな事ないですよ。私は前田くんはどちらかと言えば、吉井くんに引きずられている印象の方が強いです。吉井くんは誰にでも笑顔で話しかけてくれますから、さっきの2人の様子を見ていたら、たぶん、今も変わってませんよ」

葵は小学生時代の明久と理音の姿を思い出しているのかにっこりと笑う。

「へえ、そうなんだ」

「意外だな」

美波と雄二が理音の顔を見てニヤニヤと笑うとその様子を見て、瑞希と秀吉は苦笑いを浮かべ、理音は不機嫌そうな表情をしながらも、

「本宮、霧島、そろそろ教室に戻れ」

昼休み終了の時間を2人に教えると、

「えっ！？ もうそんな時間ですか？」

「……本当。理音、ごちそうさま」

「2人とも臭い消さないと」

葵と翔子が立ち上がると美波が理音の消臭剤を2人に振りかける。

「ありがとうございます」

「……ありがとう」

葵と翔子は美波に礼を言々と教室を出て行く。

第16問

(……今日も1人か)

葵は誰もいなくなってしまった教室で1人でため息を吐きながら掃除をしている。

(……わたしはどうしてこうなんだろう？ ウジウジして言いたい事も言えないんだろう？)

言いたい事が何一つ言えない自分が悔しくて涙が溢れそうになるが、人に見られてしまうのではないかと思い、涙を押しとどめようとした時、

「葵ちゃん、いる？」

「明久、待つのだじゃ。根本に見つかりと面倒じゃぞ」

「でも、誰も……あつ 葵ちゃん、良かった。まだいてくれて」

勢いよく教室のドアが開き、明久と秀吉が教室に入ってくる。

「ど、どうしたんですか!？」

「……」

葵は慌てて笑顔を浮かべて、2人が教室に来た理由を聞くがその表情は固く、葵の表情に秀吉は何か気づいたのか眉間に小さなシワができるが、

「これから、暇？　なんかリオがクレープ奢ってくれるって言うんだけど、葵ちゃんも行かない？」

明久は全く気づいていないようで目の前にぶら下げられた餌クレープの事を思い浮かべているようで楽しそうに言う。

「わ、わたし、教室の掃除があるから」

「1人のようじゃが、他の者はどうしたのじゃ？」

葵は自分がクラスメートからいじめを受けている事を知られたくないのか、明久からの誘いを断ろうとするが、秀吉は葵以外に誰もいない教室と葵の表情を見て言い、その声にはBクラスの間人達への怒りが見える。

「それが今日はみなさん急ぎの用事があるみたいで」

「そうなの？　それなら、手伝うよ。秀吉も良いよね？」

「もちろんじゃが、人数を増やせばかどるじやろうし、理音は…先に怜生くんを迎えに行っておるから、姫路や島田に手伝って貰うとするかのう」

「そうだね」

明久と秀吉は瑞希と美波を助っ人に呼ぶ。

第17問

「お待たせしました」

「待った？」

秀吉の連絡からしばらくすると瑞希と美波がBクラスの教室に入ってきて、当たり前のように掃除を始め出す。

「あ、あの……」

葵は明久以外の3人が当たり前のように自分の手伝いをしてくれる事に戸惑いを隠せないように何かを言おうとするが言葉が上手くでてこない。

「どうかしましたか？」

「あの……どうして？ 手伝ってくれるんですか？ 私は……」

瑞希が葵に向けて優しい笑みを浮かべて聞くが、葵は自分がいじめにあっている事を隠せていないとわかりながらも言葉をつまらせてしまう。

「簡単な事ですよ。わたしも吉井くんも美波ちゃんも木下くんも本宮さんを友達だと思ってますから」

「でも……」

「でもは無しよ。だいたい、高校生にもなってこんな事するのが信

じられないわ」

瑞希は葵の様子にすべてを悟っているように言うが、葵は信じられないようで何かを言おうとするが、美波は葵をいじめている人間の事が許せないように葵の言葉を遮る。

「成績が良くてもそんな事がわからないなんて許せないわ」

「まったくじゃ」

美波の怒りの言葉に秀吉が同意をすると、

「知ってますか？ Fクラスは成績が悪いとバカにされますけど、みんな吉井くんと同じでこういう事は許せないんですよ」

「そうみたいですわ……あの時と一緒にです」

瑞希は1人で掃除を続けている明久を顔を赤らめて見ると葵は理音を連れて自分を助けてくれた明久と今の明久が何も変わっていないと思ったようで、少し無理をしながらも笑顔を見せる。

「みんな、サボってないで手伝ってよ」

「わかってるわよ」

「そうじゃの。理音を待たせると後が大変じゃろうしのう」

「ですね」

明久の言葉に秀吉、瑞希、美波が掃除を再開すると、

「あ、あの。手伝ってもらってありがとうございます」

葵は4人に向かい頭を下げ、

「良いから、早く終わらせよう。これが終わればクレープなんだよ」

「そうそう」

葵を誰も責める事はなく4人は葵に笑顔で言う。

第18問

「みなさん、ありがとうございました」

「だから、さつきも言ったよ。変に気を使わないでよ」

掃除が終わり、葵は改めて頭を下げると明久は何度も頭を下げる葵を見て苦笑いを浮かべる。

「ですけど……」

「本宮もそこまでじゃ、あまり遅くなると理音から文句を言われるし」

「そうそう。あいつ細かい事がうるさいのよね。変なもの持ち出すし」

秀吉と美波は理音の事を話ながら苦笑いを浮かべると、

「そうかも知れませんか」

「そうですね」

葵と瑞希は2人の言葉に苦笑いを浮かべて頷く。

「それに姉上と前田、雄二に霧島、ムッツリーニでは、怜生くんが泣き出してしまうかも知れんし」

「確かに、雄二がおかしな事を言って霧島さんに何かされてそうだ

ね」

このメンバー以外に優子、雄二、康太、翔子も同伴しているようで明久と秀吉は苦笑いを浮かべたまま言う。

「確かにね。それと前田が怜生くんには何かおかしな事を吹き込んでないかも心配よ」

「そうじゃのう。理音はなぜか怜生くんには下ネタばかり教えている気がするのじゃ」

秀吉と美波は理音の怜生への教育の仕方に不安を感じているようにため息を吐く。

「でもさ。理音も怜生くんと2人である時はそんな話はしてないと思うよ」

「そうだと良いのじゃが……」

明久は苦笑いを浮かべたまま理音側に回るが周りの反応は薄く、

「葵ちゃんも、そう思うよね？」

「えーと……今はわかりませんが、前田くんは聞かれた事は面倒じゃなければ答えてくれますし、怜生くん次第じゃないかな？……と」

葵に助けを求めると葵は苦笑いを浮かべ、

「……土屋もいるのよね？」

「急ぎましょうか？」

理音と康太が怜生への性教育をしてるのではないかと言う不安が全員によぎったように5人は急いで合流場所に向かう。

第19問

「えーと、あれ何でしょう？」

「ム、ムツツリーニ!？」

葵達が理音達との合流場所に近づくと遠目に見える人影から赤い液体が吹き出て明久はその様子を見て、全力で駆けだして行く。

「……心配していた事が実際に起きたようじゃのう」

「そうみたいね」

秀吉は康太が鼻血を出して倒れたと察したようであまり息を着くと美波は苦笑いを浮かべる。

「えーと、まだ、前田くんがおかしな事をしたとは限りませんよ」

「で、ですよね」

瑞希は苦笑いを浮かべながら、理音をフォローし、葵が同意をした時、

「ぶほっ!？」

康太に駆け寄ったはずの明久が康太と同様に赤い液体を吹き出し前のめりに倒れる。

「……えーと? あそこにいかないといけないんですよね?」

「残念ながらそうじゃのう」

「……他人のふりしたくなってきたわ」

「あはは」

明久が倒れるのを遠目から眺めていた4人は引きつった笑みを浮かべながらも合流場所まで歩くと、

「やつほー みんな遅かったね。ボクも一緒に貰うよ」

「工藤さん？」

「……ムツツリー二と明久が倒れたのはお主のせいじゃな？」

「木下くん、人を疑うのは良くないよ」

合流場所にはメンバーに入っていなかった工藤愛子の姿があり、彼女は明久と康太を沈めた事に気分が良いのか、楽しそうに笑っている。

「えーと？ ……」

「あっ！？ 君が葵ちゃんだね。ボクはAクラスの工藤愛子。よろしくね」

「は、はい。本宮葵です。よろしくお願いします」

葵は愛子とは面識がないため、瑞希と美波の後ろに隠れていると、

愛子は笑顔で葵に挨拶をする。

第20問

「……工藤、お主はいつたい何をしたのじゃ？」

「木下くん、ボクは何もしてないよ。ただ、ムツツリー二くんがボクのスカートの中身に興味がありそうだったから」

「お主はいつたい何をするのじゃ!？」

秀吉が大量の鼻血を流して道路に倒れ込んでいる明久と康太に視線を移しながら愛子に聞くと愛子は笑顔で自分のスカートをめくり、秀吉は愛子から視線を逸らし、明久と康太からは再び、鼻血の噴水があがる。

「別に中にスパッツはいてるし、そこまで驚かなくて良いよ。まあ、何も反応がないのも残念なんだけどね」

愛子は3人の反応を見て楽しそうに笑いながらも自分の行動に反応しない理音に視線を向ける。

「スパッツにはスパッツの良さがある。良いか……」

「言わせないわよ!？ あんたはどうして、怜生くんにおかしな知識を与えようとするのよ!！」

「スパッツをはいてるとは言え、そう言うのは人前ではやらない方が……」

愛子は理音に視線を向けると理音はスパッツの良さを語ろうとする

が優子がそれを止めに入り、2人の様子を見て、葵は何かを察したのか声のトーンを落としながら優子に止めた方が良いと言う。

「ふーん。なるほどね。前田くんも罪作りだね」

「何を突然言い出すんですか!？」

「本宮、それは肯定してるのと変わらんのじゃ」

優子は葵が声のトーンが変わったためニヤニヤと笑いながら葵を見ると葵は全力で否定し、秀吉は葵の態度に苦笑いを浮かべる。

第21問

「ん？ 本宮、何かあったか？」

「な、何もありません！？」

理音は葵が慌てているのを見て、彼女に声をかけると葵は全力で何も無いと言いが、

「……なんで、あの娘は、女の子扱いされるのよ」

優子は葵の反応に自分のなかにある感情が彼女のなかにあると気づいたようで、理音が葵の事を気にかけていると思ったのか機嫌が悪そうにつぶやいている。

（あっ！？ やっぱ、あの人、前田くんのこと……）

葵はそんな優子の様子に自分の考えている事が確信に変わったようであっけなくした時、

「理音、雄二と霧島はどうしたのじゃ？」

秀吉はこの空気に耐えきれなくなったのか、この場にいるはずの雄二と翔子の2人がいない理由を聞く。

「あの2人か？ 結構、大所帯だからな。先に行って席を確保して貰ってる」

「確かに、結構いるしね」

「そうですね」

「なるほど、確かに雄二は上手く交渉してくれそうじゃが……」

理音は2人がいない理由を簡単に説明すると瑞希と美波は納得したようで頷くが、秀吉は理音が雄二を罠にはめた気がしているのか、苦笑いを浮かべる。

「まあ、2人には先に始めてくれと言ってあるから、今は楽しみだろうな」

「……やはりのう」

理音は翔子に捕まり、逃げられない雄二の姿を思い浮かべて邪悪な笑みを浮かべると秀吉は呆れたようなため息を吐く。

「秀吉、どうかしたか？ 俺は友人2人の恋愛を応援してるんだぞ」

「確かにそうかも知れんがあまり力づくでやるのもどうかと思うのじゃが……」

「なに、2人で喫茶店にいただけだ。きっと仲良くやっている」

楽しそうに笑う理音を見て、秀吉は深いため息を吐いてる隣で、

「そうです。きっと、『あーん』とか言って坂本くんが翔子ちゃんにケーキを食べさせてあげてるんですよ」

「そうよね。霧島さん、うらやましいなあ」

瑞希と美波は目を輝かせている。

「優子、お前は妄想の世界に旅立たなくて良いのか？」

「し、しないわよ！？ そんな事！！」

理音は妄想は優子の得意技だと思っているため、優子にふると彼女は声をあげて否定する。

第22問

(……前田くんもあの人の事が好きなのかな?)

葵は優子相手に軽口を叩いている理音を見て、落ち込みかけていると、

「……お姉ちゃん、大丈夫?」

「うん。大丈夫だよ。怜生くん」

怜生が葵の姿に気づいたようで、葵のそばまできて声をかけ、葵は怜生に心配かけないようにと笑顔を見せる。

「あれ? 葵ちゃん、怜生くんの事を知ってたの?」

「知ってるも何もさっき会話にでてたでしょ」

明久は愛子のスパッツのダメージを引きずっているようでフラフラと立ち上がりながら、葵から怜生の名前がでた事に首を傾げると、美波は呆れ顔で突っ込み。

「わたしも昔、吉井くんと一緒に、怜生くんが赤ちゃんの時に会ってますしね」

「そ、そうだよね」

葵は明久の様子に苦笑いを浮かべながら言うと、明久は理音に聞くまで怜生の存在を忘れていたため、葵から目を逸らす。

「本宮は覚えておったようじゃのう」

「そうみたいです。でも、4年以上も前の話ですし」

葵と明久の様子に秀吉はため息を吐くと瑞希は苦笑いを浮かべ、明久をフォローしようとするが、

「まあ、バカだから、記憶する容量が少ないからな。必要ないと判断したものはすぐにデリートしないと容量が間に合わないんだ」

「そうね。アキだもんね」

「ちょっと、リオに美波、さすがに言い過ぎだよ!？」

理音は明久を小バカに美波が同意すると明久は心外だと言いたげに声をあげる。

「……」

「本宮さん、どうかしたの？」

葵が理音と明久のやりとりを見ていると優子と愛子が葵に近づいてくる。

「いえ。前田くんも吉井くんも昔と変わらないなあ……って」

「そうなんだ」

葵は理音と明久の様子に小学校時代の事を思い出したようでくすく

すと笑うと愛子は納得したように頷くが、

「……………」

優子は自分の知らない理音を知っている葵に嫉妬の視線を向ける。

第23問

「優子、素直にならないと葵ちゃんに前田くん、取られちゃうよ」

「な、何を言ってるのよ!? あ、あたしは別に」

愛子は葵に敵意の視線を向けている優子を見て、イタズラな笑みを浮かべて周りに聞こえないように耳打ちをすると優子は慌てて否定する。

「まあ、認めないなら、ボクは良いけど、前田くん、そろそろ行くよ。代表と坂本くんも待ってるだろうし」

「いや、ちよつと待て」

愛子は理音に雄二と翔子に合流しようと言うが理音はその言葉を制止すると制服から携帯を取り出し、

『霧島、後、どれくらい2人つきりで居たい?』

と素早くメールを打つと、

『ずっと』

すぐに翔子から返信されてくる。

「あいつらは2人で良いだろ」

「そうですね。デートの邪魔になっちゃいますし」

雄二の意見など聞かずに翔子の意見だけを取り入れ、瑞希は雄二と翔子の姿を仲の良いカップルに脳内変換しているため、目を輝かせながら頷く。

「それじゃあ、どこにするの？」

「場所変えるなら、駅前の『ラ・ピュセル』とかどうかな？ クレームが美味しいってウワサなんだけど」

「あ、そこ、わたしも聞いた事あります」

明久は理音の言葉を理解すると次の店を考え始め、その言葉に愛子はある喫茶店の名前をだすと葵は同意するが、

「そこは却下だ」

理音は名前がでた喫茶店に何かあるのか拒絶する。

「それなら、どうするの？」

「ワシらも喫茶店はあまり行かんからのう」

優子と秀吉が首を傾げた時、誰かの携帯がなる。

「……………明久、電話」

「うん。…………あれ、誰だろう？ 非通知だ」

明久は制服から携帯を取り出し、電話にでると、

「……明久、お前を殺す」

「どうしよう。いきなり、知らない人から殺人予告されたよ!？」

電話の相手は雄二のようで明久に殺人予告が発せられ、明久は雄二が相手だと気づいていないようで身に起きている恐怖に身体を震わせる。

「雄二、もう少ししたら行くから待ってる」

「本当だろうな。他の店に行こうとしてたりしないよな？」

理音は明久から携帯を取り上げて雄二に口ではもうすぐ行くと言うが、雄二は当然、疑ってかかり、

「……ちっ」

「おい!？ 何だ、今の舌打ちは？ おい。理音、な……」

理音は舌打ちをすると雄二は理音に文句を言い始めるが、理音は平然と携帯の電源を落とす。

「……お兄ちゃん、行こう」

「ああ。行くぞ」

怜生が理音に向かい言つと、理音は優しく微笑み、怜生の手をつかみ。

「店が見つからないから、あいつらが待ってる店にするぞ」

雄二と翔子がいる喫茶店に向かう。

第24問

「それで、これって何の集まりなんですか？」

「この間、前田の家の引越を手伝ったお礼だつてさ」

「ボクはこの間、怜生さんと遊んだら、そのお礼だつて誘ってもらった」

葵はどうしてこんな人数が集まっているか聞かされていないため、首を傾げると美波と愛子が葵に説明をする。

「わたし、何もしてないのに良いんですか？」

「良いの。良いの。リオが奢ってくれてるって言ってるんだから、葵ちゃんは気にしなくて良いの」

葵は自分だけ場違いだと思ったように遠慮がちに言うと明久はすでにエネルギーを摂取できる事が嬉しいようにで笑顔を見せ、

「……瑞希、島田。余所見してると危ないぞ」

「は、はい。すみません」

「前田、助かったわ」

そんな明久の笑顔に見とれていた瑞希と美波は車道に出そうになり、理音は2人の首根っこをつかむ。

「べつに気にするな。だいたい。何もしてないと言うなら、優子もあまり変わらんし、康太もきてないしな」

「確かに、姉上はすぐに足を痛めておったからのう」

「わるかったわね。と言うか、女の子に力仕事をさせたあんたが悪いんだよ」

理音は優子は役立たずだったと言うと秀吉はその日の事を思い出してため息を吐き、優子は理音が悪いと言いたげに不機嫌そうに言う。

「……………理音が秀吉のお姉さんを傷物にした」

「ムツツリー二くん、その言い方は誤解を産むよ」

康太は理音と優子の様子にポツリとつぶやくと愛子は康太の言葉を聞いて楽しそうに言う。

「傷物になんて……………前田くん、何をしてるんですか！！責任をとれるんですか！！」

「……………本宮、お前は何を勘違いしてるんだ？俺は優子に何もして……………ないな」

葵は康太と愛子の言葉に何かを勘違いしたように顔を真っ赤にして声をあげると理音は否定しようとするが、何かが引っかかる。

「ねえねえ。優子に何したの？」

「ん？工藤、お前は知ってるだろ。胸を……………」

「理音！！ それ以上言うな！！」

愛子は理音の様子に楽しそうに聞くと理音は平然と優子の胸を揉んだ事を話そうとすると優子は全力で理音を止めるが、

「ああ。あれだね。確かにリオはお姉さんの胸を揉んでるから、傷物にしたと言えなくもないね」

明久は空気を読まずに言う。

第25問

「吉井くん、ちょっと良いかしら」

「え？ 秀吉のお姉さんからの誘いなら、ボクが断れるわけ……」

「吉井くん」

「アキ」

「えっ？ 何？ 姫路さんも美波もどうしたの？」

優子は空気を読まない明久を見て、完全に頭に血が上ったようで、得意の逆間接をかけるために明久を笑顔で呼ぶと明久は優子について行こうとするが、良い笑顔の瑞希と美波に肩を捕まれる。

「優子、残念だろうが、アキへの体罰は次の機会にしろ」

「……別に体罰なんて」

肩を捕まれ、路地裏へと連れ込まれて行く明久の様子に理音が表情を変える事なく言うと、3人の様子を見て、優子は少しだけ冷静になったように頷く。

「へえ、優子が前に隠してた秘密ってそれか。でも、もう隠す必要ないよね？」

「そ、そんな、まだ、わたしたちは高校2年生です。そんなのは早いです」

愛子はニヤニヤと優子を見て言い、葵は愛子とは対照的に落ち込んだように言う。

「優子は前田くんから保健体育の実技を個人レッスンを受けてるんだし、今更、隠す事じゃないしね」

「ち、違うわよ！？ おかしな事を言わないでよ！？」

愛子は優子をかからかい始めると優子は顔を赤くして否定している。

「……」

「本宮、お主、大丈夫か？」

葵のなかでは、先ほどのやりとりですでに理音と優子は付き合っていると思ったように表情を暗くすると、秀吉は彼女の様子に気づいたようで心配そうに彼女の顔を覗き込む。

「だ、大丈夫です。心配しないでください」

「……そうじゃのう。一応は、ワシは立場的にどうフォローしてよいかわからんしのう」

葵は秀吉の様子に少し無理をしたように笑うと、秀吉は現在、自分が一番微妙な位置にいる事を理解しているせいか苦笑いを浮かべると、

「まあ、ワシは姉上が理音の事を好いておる事を知っておるゆえ、あまり、お主の肩を持つわけにもいかんのじゃが、お主の考えは早

合点じゃ、まだ、2人はつきあうてはおらん」

「そうなんですか？」

「理音はどれも鈍いようでのう」

葵に理音と優子は付き合っていないと教え、2人を交互に見てため息を吐く。

第26問

「前田くんが鈍い？」

「ん？ 何かあったのか？」

秀吉の言葉に葵は首を傾げると秀吉は葵が首を傾げている理由を聞く。

「い、いえ。わたしのなかにある昔の前田くんと違ってたので」

「そうなのか？」

「はい。前田くんも吉井くんも小学生の時は人気ありましたし、吉井くんは気づいてなかったみたいですけど、前田くんはそれなりに返事をしてたと思います」

葵は昔の理音と明久の様子を思い出して言うと、

「……しかし、そのようには見えんのじゃ」

秀吉は理音と優子を眺めながら言う。

「おい。本宮、秀吉、そろそろ行くぞ。雄二からの電話がうるさいしな」

「わかったのじゃ……まあ、理音もあつちで研究ばかりしていたよ
うじゃから、昔とは変わっているのじゃろっ」

「そうですね」

理音が携帯電話を見ながら葵と秀吉を呼ぶと2人は話を切り上げて前を歩いているメンバーに追いつくと、

「秀吉、葵ちゃんはずいぶん、たのしげだったね」

「そんな事はないのじゃ」

明久は『美少女秀吉』が葵と仲良くしている事が気になったようで秀吉に言つと秀吉は苦笑いを浮かべて否定する。

「まあ、この面子じゃ、俺とアキを抜かせば、次に会ってるのは秀吉だしな」

「確かにそうですね」

理音は明久の言葉にくだらなめと言いたげに言つと葵は苦笑いを浮かべて、理音の言葉に頷く。

「そうだね。やっぱり、女の子は女の子同士、楽しく話をしなきゃ」

「明久、何度も言わせるでない。ワシは男じゃー!!」

「えっ!?!」

明久はそれでも秀吉を女の子扱いすると秀吉は声を上げて否定するが、その言葉に葵は驚きの声をあげる。

「……本宮、見ればわかるだろ」

「そ、そうですね。木下くんは男子の制服着てますし」

「それ以外では気づいて貰えんのかのう」

葵は慌てて言うと、秀吉はその言葉に落ち込むと、

「そ、それにお姉さんとそっくりだから、双子の美人姉妹だと」

「本宮、フォローになってないぞ」

「す、すいません!？」

葵は慌ててフォローしようとするがフォローになっておらず、理音が突っ込みを入れると葵は秀吉に向かい全力で頭を下げる。

第27問

「……やっときたな」

「すいません。10人なんですけど、席空いてますか？」

雄二は理音達が店についたのを見て、安堵のため息を吐くが理音はお約束だと言いたげに店員に他の席へと案内して貰おうとするが、

「……理音、いい加減にしなさい。すいません。先に2名、きているんですけど」

優子はため息を吐きながら、理音を止めると雄二と翔子に合流する。

「優子、せっかく、俺が坂本夫妻を2人つきりにしてやろうとしているのに」

「あんたの場合は代表と坂本君で遊ぼうとしているだけでしょ」

理音と優子が言い合いを始めているなか、

「これで全員そろったな」

「……雄二、場所移動は許さない」

雄二は人数が集まったため、翔子の近くから離れようとするが、当然、翔子に捕まり、後からきたメンバーが適当に席につき、メニューを選んだ後、

「えーと、木下くん、本当にすみませんでした」

「良いのじゃ。どうせ、ワシは男らしくなどないのじゃ」

先ほどの秀吉が女の子だと言う発言を引っ張っている葵と秀吉の姿がある。

「理音、あの2人はどうしたんだ？」

「ん？ 例のごとく、秀吉が本宮に女と間違えられただけだ」

「またか」

雄二は怜生が近くにいれば翔子からの過剰な愛情表現が抑えられるためか、理音と怜生を同じテーブルに誘ったため、今は理音、怜生、雄二、優子、翔子の5人で1つのテーブルを囲んでいる。

「秀吉の容姿のせいもあるが、あいつは演劇部で女役もするからな勘違いする人間は多いだろうしな」

「まったくだ。それに秀吉が自分は男だと言っても聞き入れないヤツらばかりだしな」

「まあ、ヘタな女より、かわいい上に天然なところがあるからな。そこも勘違いされる原因だろ」

理音と雄二が苦笑いを浮かべているなか、

「……お姉ちゃん、どうかしましたか？」

「！？ な、何でもないわ」

優子は自分より秀吉の方が男子生徒に人気があるのが気に入らないため、苦虫を噛み潰したような表情をすると怜生が心配そうに優子の顔を覗き込み、優子は慌てて何も無いと言う。

第27問（後書き）

どうも、作者です。

感想のユーザー指定を解除しました。忘れてました。感想いただければ幸いです。

第28問（前書き）

2話更新です。

第28問

「そう言えば、葵ちゃん」

「どうかしましたか？」

葵の秀吉への謝罪も落ち着いたところ、明久が葵に声をかける。

「葵ちゃんはあれをまだ続けてるのかな？　と思つて」

「……はい」

明久は葵の小説家になりたいと言つ夢を思い出したようで葵に聞くと彼女は恥ずかしそうに頷く。

「まだ続けてたのか？　今はどんなのを書いているんだ？」

「理音！？　あんた、いきなり、何をしてるのよ？」

葵の返事を聞いて、理音は葵の承諾も得ずに彼女のカバンをあさり始め、優子は理音を止めるが、理音は優子では止められないが、

「……お兄ちゃん、他人のものを勝手にいじるのは良くないと思います」

「……」

怜生の一言で理音は止まる。

「前田も怜生くんにはかなわないわね」

「そうですね。あの、葵ちゃん、前田くんが書いてると言ってますけど」

「あ、あの」

理音の様子に瑞希と美波は苦笑いを浮かべた後、瑞希が遠慮がちに葵に聞くと彼女は恥ずかしそうに目を伏せる。

「別に恥ずかしがる事じゃないだろ。まだ続けてるって事はちゃんと前に進んでるんだからな」

「と、言う事で葵ちゃん、見せて」

「……前田くんも吉井くんも本気で言ってます?」

「当然だな」

「うん」

理音はカバンをあさる事をあきらめて、葵に言うとは明久が続ぎ、葵は恥ずかしいため、断ろうとするが、2人が引くわけがない。

「む、無理です!?!」

「誰にも見せないからさ」

「うそです。吉井くんの目は誰かに見せて、笑うつもりだって目をしてます!?!」

「そんな事ないよ」

葵はテンパってきたようで慌てて嫌がるが明久は引かない。

「理音、本宮は何を書いてるんだ？ 小説か？ 絵か？」

「小説。ガキの頃からの夢なんだ。それが原因で俺とアキは本宮と仲良くなつたんだしな」

雄二は明久と葵の様子に葵いじりを止めた理音に聞くと理音は葵が隠そうとしていた事を隠すことなく答える。

「小説？ スゴいね。ボクにも見せてよ」

「わたしもみたいです」

「ダ、ダメです！？ 恥ずかしいですう」

理音の言葉に瑞希と愛子が葵に見せて欲しいと言うと葵はカバンを抱きしめて小さくなる。

「……明久、姫路、工藤もそれくらいにするのじゃ。本宮が本気で嫌がっておるのじゃ」

秀吉は葵の様子を見かねて止めに入るが、

「本宮、趣味じゃなくて今も本気で目指しているなら、今じゃなくて良いから見せろ。今回はいきなりすぎたしな」

「そうそう。ボクもリオも小学生の時から葵ちゃんの小説のファンなんだからね」

「は、はい。ごめんなさい。取り乱しました」

理音と明久はからかつてるつもりは本当になかったようで、葵に向かい落ち着いたら見せてくれと言うと、葵は2人の言葉に落ち着きを取り戻したようで頷く。

「しかし、理音と明久が読みたがるなら面白いんだよな。俺にも見せてくれよ」

「……雄二が読むなら、私も読む」

「……………明久がマンガ以外を読みたがるのは意外」

「そうね」

理音と明久の様子に葵の小説を読んでみたいと言う声上がり、

「む、無理ですう」

葵は再度、テンパる。

第29問

「……………」

「……………ああ、なんか。すまん」

葵は周りからの言葉に押しつぶされたようで小さくなり、理音に恨めしそうな視線を送ると理音は何となく謝る。

「……………やるわね。あの、前田に謝らせるなんて」

「……………初めてみた」

理音が謝る様子に美波と康太は驚きの声を上げると、

「いやあ。ボクが言うのも何だけど、葵ちゃんもリオも変わらないなあ」

「そうなんですか？」

明久は葵と理音の様子を見て、昔を懐かしむように言い、瑞希は明久に聞き返す。

「……………理音、お主、以前から、本宮をからかっておったのか？」

「そんなつもりはないんだが、基本的に俺はドが付くくらいのサデ
イストだから、こういう反応をされるといじめ抜きたくなるんだが
……………」

「リオは葵ちゃん相手だどこか甘いか……ぐほっ!？」

秀吉はため息を吐きながら理音に向かい言つと、理音は苦笑いを浮かべ、そんな理音の様子に明久は理音をからかうように言つと明久の口には定番になりかけている栄養剤が投入される。

「……ふーん。理音はずいぶんと『本宮さんにだけ』は優しいのね」

「ダメだよ。優子、前田くんに『あたしはいじめて欲しい』って言わないと」

優子は葵、理音、明久の会話を聞いて、少し不機嫌そうに言つと、愛子がニヤニヤと笑いながら優子に耳打ちをする。

「愛子、そんなんじゃないわよ!？」

「そんなのって、どんなのかな」

優子は全力で否定するが、愛子はそんな優子の様子を見て、楽しそうに笑う。

「……なあ、秀吉、明久も姫路もそうだが、理音に本宮とあいつらの卒業した小学校は『天然』を作ると言う特殊なカリキュラムでもあるのか？」

「……何とも言えんのじゃ」

雄二と秀吉はため息を吐く。

「わけのわからん事を言うな……ん？ 店も混んできたな。そろそ

ろ、解散するか？」

「そうね。うちもあんまり、葉月を1人にさせるわけには行かないから、そろそろ、お開きにしない」

理音は店が混んできたのを見て解散するように言つと美波も同意すると、全員が納得して解散となる。

第30問

「それじゃあ、葵ちゃん、帰ろうか？」

「はい……あれ？ 前田ちゃんと怜生くんは」

喫茶店から出ると明久は葵と近所に住んでいるため、帰ろうと葵を誘うと葵は理音と怜生が自分とは帰る方向が違うのに首を傾げる。

「ああ。言ってなかったな。俺は今は昔、遊んだ洋館に住んでる」

「……洋館？ って、あのお化け屋敷ですか！？」

理音は葵に向かい今の家の事を話すと葵は昔、理音と明久に連れて行かれた事があるようで顔を青くする。

「……お主達は昔、本宮に何をしたのじゃ？」

「別に何もしていない。本宮が勝手に驚いていただけだ」

「まあ、女の子にはちょっと、怖かったかもね」

秀吉は葵の様子に理音と明久が葵をからかっていたと思ったようでジト目で見えるが、理音と明久は何もしていないと言う。

「まあ、電気もきちんと通したし、幽霊なんか非科学的なものでもないから、そのうち遊びにこい」

「良いんですか？ わたしなんかを誘って？」

理音は葵の様子にため息を吐きながらも家に遊びにこいと言つと葵は理音の言葉に驚いたようできょとした表情で聞き返す。

「当たり前だ」

「そうそう。リオの家は広いし、快適だからね…… 畏さえなければ」

「…… 畏？」

「…… 理音、お前、結局、設置したのか？」

理音は葵が聞き返す意味がわからないと言つと明久も理音に同意しながらも理音が家に仕掛けている畏に葵がかかる事を心配し、雄二は明久の言葉にため息を吐く。

「畏はロマンだろ」

「…… はい」

雄二のため息に理音は平然と言い切ると怜生は理音の言葉に頷く。

「…… あんまり似てない兄弟だと思つたけど、前田ちゃんと怜生くんって似てるね」

「…… そうなのよ。困つた事にね」

愛子は怜生が理音の言葉に頷くのを見て苦笑いを浮かべると優子はため息を吐き、

「優子も大変だね。怜生くん教育方針は前田くんに任せてばかりじゃダメだよ」

「……優子がしっかりと怜生くん教育計画を立てるべき」

「代表も愛子も何を言ってるんですか!？」

愛子と翔子は優子をからかいだす。

「木下さん、そうですよ。そして、わたし達が子供を育てるようになった時にどういう風にすれば良いか。教えてください」

「……雄二、わたしも子供が欲しい」

「翔子、わけのわからん事を言うな!？ 理音とがきんちよは兄弟だ!？」

瑞希のなかではすでに理音と優子は夫婦と認識され始めているように優子につかみかかるように言う。翔子は雄二に迫り、雄二は翔子から逃げだし、翔子は雄二を追いかけて行く。

「……あはは。なんか、勝手に解散始まったけど、どうしよっか？」

「まあ、良いだろ。俺と同じ方向なのは」

「ボクかな？ 怜生くん、一緒に帰ろう」

「……はい」

愛子は雄二と翔子の様子に苦笑いを浮かべると理音は今度こそ解散

だと言い、解散する。

第31問

「……あの、前田くんか、吉井くんを」

翌日、葵は理音と明久の言葉に完結まで書き上げた小説を持ってFクラスの教室を覗くと、

「葵ちゃん、どう……」

「「「異端者には死の鉄槌を！！」」」

「えっ！？ えっ！？」

明久は葵に気づき、廊下まで行こうとするが怪しい覆面集団に捕まり、教室に立てられた巨大な十字架に張り付けられて行き、葵は意味がわからずに怯えたような表情をする。

「……本宮、すまんのじゃ」

「木下くん、吉井くんはどうして、張り付けられているんですか？」

秀吉はどうしたら良いのかわからなくなっている葵に声をかけると葵は疑問に持っている今の状況を秀吉に聞く。

「……と言っわけなのじゃ」

「えーと、FFF団ですか」

秀吉は葵に明久を拉致していった集団の事を説明すると葵は苦笑い

を浮かべる。

「で、でも、女の子と話ただけで、制裁の対象なら、木下くんも危ないんじゃないですか？」

「ワシは大丈夫じゃ。困った事に何度言ってもあ奴らはワシを男扱いせぬのじゃ」

「そうなんですか」

葵は自分も間違えていたため、FFF団が秀吉を女の子扱いすると聞いて苦笑いを浮かべるなか、秀吉は落ち込んでいるようである。

「大丈夫ですよ。前田くんや坂本くんみたいに木下くんを男性と扱っている人もいますし、木下くんはちょっと線が細いですけど、立派に男の子です」

「ありがとなのじゃ。気を使ってくれてるとは言え、嬉しいのじゃ」

「!?!」

最近では瑞希や美波と言った女子生徒からも秀吉を女の子扱いするため、葵の言葉に秀吉は嬉しいようで笑顔を見せるとかわいすぎる秀吉の笑顔に葵は驚き、秀吉から視線を逸らす。

「本宮、お主、どうかしたのか？」

「い、いえ、何でもないです。気にしないでください!?!? ……ふえ!?!?」

「おっと、本宮。危ないぞ」

「……本宮、お前は何がしたいんだ？」

秀吉は葵が視線を逸らした意味がわからずに葵を心配するように彼女の顔を覗き込むと葵は慌てて、秀吉から距離を取った時に教室に戻ってきた理音と雄二にぶつかり、反動で秀吉の方に戻って行く。

「本宮、ケガはしてないじゃろうな？」

「は、はい。木下くん？……ふしゅううう」

秀吉は葵を抱き止めた形で床に腰を下ろしながら、葵を心配すると、彼女は目の前にある秀吉の顔を見て、顔を真っ赤に染めて気を失う。

「本宮、お主、どうしたのじゃ！？」

「……オーバーヒートだな」

「免疫なさそうだからな。それに、あの距離だしな」

秀吉は慌てて葵の体を揺するが彼女は反応する事なく、葵の様子を見て、理音と雄二はため息を吐く。

第32問

(……あれ？　ここって、保健室？)

葵は気を失った後、保健室に運ばれ、目を覚ました葵は状況がつかめずに首を傾げる。

「本宮、目を覚ましたようじゃな」

「き、木下くん！？　わ、私、どうして保健室にいるんで……！？　ど、どうして、木下くんがそれを！？」

葵の寝ていたベッドの横には秀吉が座っており、葵は秀吉に今の状況を聞こうとするが秀吉は葵の書いた小説を読んでおり、葵は慌てて秀吉に言う。

「ワシのせいで、本宮が気を失ったからのう。起きるまでそばにいろと言ったら、理音と明久が貸してくれたのじゃ。本宮に承諾も得ずに読んだ事は謝るのじゃ。すまんのじゃ」

「木下くん！？　頭を上げてください！？」

秀吉は葵に許可も取らずに、自分の好奇心を優先して小説を読んできた事を謝ると葵は秀吉の様子に申し訳なくなったのか、秀吉に頭を下げる。

「……本宮、頭を上げてくれぬか？　ワシが悪いのじゃから、お主が謝る理由がないのじゃ」

「そ、そうですね」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべると葵は落ち着いたようでもう頭をあげる。

「あ、あの、木下くん……」

葵は秀吉が自分の小説を読んでいたため、感想を聞きたいが言い出せずにいると、

「理音や明久がファンだと言っておった意味がわかったのじゃ。まだ、途中までしか読んでおらんのが、本当に面白いのじゃ」

秀吉は葵の様子に彼女が何を期待しているか理解したようでもう葵の小説を読んだ感想を素直に言う。

「本当ですか？」

「本当なのじゃ。ワシは演劇部で。演技の練習のために台本や小説はたくさん読むのじゃが、ここまで、話に引き込まれたのは久しぶりなのじゃ。本宮は才能があるのじゃ……！？ も、本宮、どうして泣くのか！？ 何かワシはおかしな事を言ったのかのう？」

葵は秀吉の言葉に聞き返すと秀吉は先ほどの言葉に嘘はないと言うと、葵は秀吉の言葉がよほど、嬉しかったようでもうボロボロと涙を流して喜ぶが秀吉はそんな葵の様子を見て慌てる。

「木下くんは悪くないです。木下くんが私の小説を誉めてくれたから、嬉しくて……今まで、前田くんと吉井くん以外の人は私の小説を読んでも、そんな事を言ってくれなかったから、私には才能なん

かないって、夢ばかり見て現実も見れないバカ女だって」

「そんな事はないのじゃ。ワシも明久も理音も本宮の小説は面白いと思っただのじゃー！ それに才能がないと言われても諦めきれないのじゃ。少なくともワシは本宮に才能はあると思っただのじゃ」

葵は今までに自分の小説を読んだ人間の悪意に傷をおっているように、ボロボロと大粒の涙を見せながら言う。秀吉は心から思っているように彼女に向かい微笑みかける。

「ワシは思っただのじゃ。本宮のように純粹に夢を追いかけている人間は周りはうらやましく思っただのじゃ。自分にはそこまで真剣に打ち込めるものがないから、だから、邪魔をしてしまっただのじゃ」

「……」

「誰もが本宮のように真っ直ぐには進めんのじゃ。だから……」

「木下くん、ありがとうございます」

秀吉は葵を励ますと葵は秀吉の心づかいが嬉しかったように笑顔を見せる。

「わ、わかってくれれば良いのじゃ」

秀吉は葵の笑顔に照れたのか少し顔を赤くして葵から視線を逸らすと、

「本宮、そろそろ、帰るのじゃ。下校時間も近いしのう」

「えっ！？　もうそんな時間なんですか！？」

葵に下校しようと言うと葵は慌てて時間を確認すると秀吉の言う通りの時間である。

「わ、私、鞆を取ってこないと！！」

「待つのじゃ。鞆なら、ここにあるのじゃ！！」

「……どうしてですか？」

「……放課後になってすぐに理音が取ってきたのじゃ」

「……前田くんらしいですね」

「そうじゃのう」

葵は秀吉と顔を合わせて苦笑いを浮かべると2人で下校する。

第33問

「あの……」

「あつ！？ 葵、隠れてないで入ってきなさいよ」

葵は昨日の事を理音と明久に謝ろうとFクラスの教室を覗くと葵を見つけた美波が手招きをする。

「えーと、良いんですか？」

「気にしないの。入ってきなよ」

「はい」

葵は遠慮がちに言うと美波と瑞希が葵を呼び、

「お邪魔します」

葵は遠慮しながら、Fクラスの教室に入る。

「あの。昨日は皆さんに迷惑をかけたみたいですいませんでした」

「良いのよ。元々はアキが悪いんですよ」

「葵ちゃんは悪く無いですよ。それに私達は誰も気にしてませんから、それより」

葵は瑞希と美波に昨日、教室で倒れた事を謝ると2人は気にする事

はないと言っ。

「それより？」

「「この続きはないの？」」

葵は2人の様子に首を傾げると瑞希と美波も葵の小説を理音と明久から勝手に借りていたようで興奮気味に言っ。

「えーと？」

「あつたら、読ませてください」

「ウチは日本語がまだ読めないから、昨日、前田に1冊、ドイツ語に訳して貰ったの。日本語の本はウチ読めないから、あまり読まなかったんだけど、葵の小説、凄く続きが気になるのよ」

葵は状況がつかめずに首を傾げると理音と明久は葵の小説を布教に入っているようで瑞希と美波だけでなく、他のFクラスの生徒からも下心はありそうだが、同じように葵の小説の続きが読みたいと言っ声が響く。

「な、な、何で、皆さんがそれを！？」

「前田とアキ、木下が面白いつて言っから読ませて貰った」

「はい」

「……」

瑞希と美波は小説の続きを期待した視線で見たまま言つと葵の顔は
みるみるうちに真っ赤に染まり、

「葵ちゃん!？」

「葵、どこに行くのよ!？」

恥ずかしくなったように全力でFクラスの教室から逃げ出す。

第34問

「本宮!？」

「……また逃げたか」

葵が教室から逃げ出したのを見て、理音は冷静に葵を見送るが秀吉は葵の様子を見て慌てている。

「理音、お主はどうしてそんなに冷静なのじゃ!？」

「昔からだからな。プレッシャーに負けると逃げ出すんだ。本宮の書く物語は面白いが自分に自信がないから、評価をされそうになると逃げ出すんだ」

秀吉は理音に葵の事を聞くと理音は表情を変える事なく答える。

「そうなの？」

「悪い事をしてしまいましたか？」

理音と秀吉の様子を見て、瑞希と美波が声をかけるが、

「そんな事はないだろ。お前らは本宮の物語を正當に評価しようとした。あいつはそのプレッシャーに負けただけだ」

理音は冷静な口調で言う。

「自信の問題ですか。私は少しわかる気がします」

「精神的な問題は難しいのう」

瑞希は自分と葵を重ね合わせているようで小さな声で言つと秀吉は困つたように笑う。

「……まったくだな。俺は本宮は才能があると思うし、このまま書き続けて欲しいとは思つが悪い感想を受ければ直ぐに逃げ出しそうだからな」

「それは小説家にはなれないって事？」

理音はため息を吐きながら言つと美波は心配そうな表情をする。

「……あいつしただい」

「それは冷たくない？ 前田、どうにかできないの」

「後は荒療治ならやり方はあるが……」

「……荒療治。理音、本宮の事はワシに任せてくれんかのう」

「ああ。お前が適任だろ。任せるよ」

理音には考えがあるようでそう言つと秀吉は自分にやらせて欲しいと言つ。

第35問

「荒療治？　って、前田、木下、何をするつもり？」

「やり方ならいくらでもあるだろ。あいつはそれを書いた人間だ」

「これですか？」

美波は理音と秀吉に何をする気かと聞くと理音は瑞希が持っている葵の小説を指差す。

「これをどうするの？」

「それを使うと言うのは直接的すぎるのじゃが、本宮は話を書くのが好きなのじゃ、それを披露させるのじゃ」

「どうやって？」

「演劇部が公演をする予定があるのじゃ。その脚本や演出を手伝って貰おうと思うのじゃ」

秀吉は演劇部の手伝いを葵にさせると言う。

「でも」

「いきなりすぎない？」

「あいつは自信がない上に、人と関わるのが苦手だからな。少しづつでも人にかかわりを持たせるのが重要だから……」　　「たたく、カウ

ンセリング関係は本職じゃないんだ。めんどうだな」

「そう言いながらも理音は本宮の力になるのじゃろう?」

瑞希と美波は心配そうな表情で言うが理音はため息を吐くが秀吉はそんな理音を見て優しく微笑む。

「……むう」

「確かにね。前田、ウチも手伝うから葵の事、頼むわよ」

「はい。わたしも手伝います」

理音は秀吉の言葉にバツが悪そうな顔を見ると瑞希と美波も葵の手助けを言うと言う。

「……ああ。男の俺や木下じゃ助けられない部分もあるからな。そこは任せる」

「そっじゃのう」

「木下、何を言ってるのよ。あんたもこっち側でしょ」

「島田、ワシは男じゃ」

理音は2人に葵のフォローを任せると美波も秀吉を同性と扱っており、秀吉は落ち込んだようで肩を落とすが瑞希と美波は秀吉が落ち込んでいる意味がわからないようで首を傾げている。

「……いや、秀吉には頼みたい事があるから、そっちからは外して

くれ」

「そうなんですか？」

理音は明久達クラスメート男子だけでなく瑞希と美波にまで女性扱いされている秀吉の様子に苦笑いを浮かべて言うと、瑞希は首を傾げる。

「ああ。本宮の苦手を治すのは秀吉が適役だからな」

理音は何かを企んでいるようで邪悪な笑みを浮かべると、

「……葵、大丈夫よね？」

「だ、大丈夫だと思いますよ」

「……心配になってきたのじゃ」

理音の様子を見て、3人は一抹の不安を覚える。

第36問

(……本宮はいるかのう?)

秀吉は帰りのHRを終えると葵を訪ねるためにBクラスの教室を覗くが、

(……いないようじゃな。それなら、根本に見つかる前に退散するかのう)

教室には葵の姿はなく、秀吉は教室から離れようとすると、

「木下? Fクラスが俺達、Bクラスに何のようだ?」

一番会いたくなかったBクラスの代表「根本 恭二」に見つかる。

「根本か? 友人を訪ねにきただけじゃ」

「友人? ……本宮なら、今日は中庭の掃除だ」

秀吉は恭二の顔をあまり見ていたくもないため、すぐにこの場から離れようとすると恭二の口からは秀吉が葵を探してると言い当てる。

「根本、なぜ、お主が?」

「お前と前田は友人だろ。後は昨日、前田が本宮のカバンを取りに来たからな。誰でもわかるだろ」

秀吉は恭二の言葉に首を傾げると恭二はくだらない事を言うなと言

うと、

「さっさで行け。俺以外にもFクラスを敵視してるヤツは多い。昨日は前田、今日はお前となると騒ぎ出す」

不機嫌そうに秀吉を追い払うように言う。

「お主に何があったかはわからぬが、ありがとうなのじゃ。行ってみるのじゃ」

「お前に礼を言われる筋合いはないね。他に用がないなら、さっさで行け」

秀吉は恭二に頭を下げると恭二は素直に礼を言われなれていないのか秀吉から視線を逸らすと秀吉を追い払うように手を振る。

(……ふむ。理音と根本は知り合いなのじゃろうか？ 機会があれば聞いて見るかのう)

秀吉は恭二の様子に苦笑いを浮かべた後、恭二から聞いた葵がいるであろう中庭に急ぐ。

第37問

（……また、わたし1人か）

葵は今日も1人で掃除をしており、自分1人に掃除を押し付けるクラスメートに何も言えない自分が情けなくて目から涙が溢れ出た時、

「いたのじゃ。根本に礼を言わんといけんのう」

「木下くん？」

秀吉が葵を見つけ駆け寄ってきて、葵は秀吉が自分を探していた意味がわからないが泣いている姿を見られたくないため、慌てて涙を拭く。

「……本宮、お主、泣いておったのか？」

「な、何をいきなり言ってるんですか？」

秀吉は葵の様子を見て言うと葵は笑顔を見せるが、頬には拭ききれなかった涙が残っている。

「……やれやれなのじゃ。理音や明久が言う通り、お主はわかりやすいのじゃ」

「き、木下くん!？」

秀吉は葵が嘘を吐いている事がわかると言うと言と制服のポケットからハンカチを取り出して、葵の涙を拭き、葵は秀吉のいきなりの行動

に慌てて1歩下がる。

「本宮、ワシも掃除を手伝うのじゃ」

「木下くん、ダメですよ。この前も手伝っていたきましたし」

秀吉は葵の様子に苦笑いを浮かべて掃除を手伝うと言うと葵は申し訳ないと言うが、

「気にするでない。まあ、本当の事を言うとワシは本宮に頼みたい事が有ったのじゃ。掃除を手伝う代わりにそれをきいてくれんかう」

秀吉は葵に手伝って欲しい事があり、交換条件だと言う。

「頼み事ですか？ わたしにできる事なら構いませんけど」

「本宮にしか頼めんのじゃ。それでは交渉成立したようじゃし、片付けるかのう」

葵は内容も聞かずに頷くと秀吉は笑顔を見せて、掃除を終わらせようと言い、

「は、はい。よろしくお願いします」

葵は秀吉に頭を下げる。

第38問

「木下くん、ありがとうございました」

「頭をあげるのじゃ」

中庭の掃除を終えると葵は秀吉に深々と頭を下げると秀吉は苦笑いを浮かべる。

「それで、今日は時間は問題ないかのう」

「は、はい。私は予定なんかありませんから……」

「……落ち込むのなら、自分で言うのではないのじゃ」

葵は遊ぶ友人などいないと言い、落ち込みだし、秀吉は苦笑いを浮かべたまま言う。

「……はい。それで木下くんの頼み事って何ですか？」

「うむ。歩きながら話すから、付いてきて欲しいのじゃ」

「はい」

秀吉は葵に付いてきてくれと言うと葵は秀吉から1メートル後ろを付いて追いかけてくる。

「……本宮、距離をとらないでくれんかのう。話難いのじゃ」

「う、ごめんなさい!？」

秀吉は葵に並んで歩くように言うと葵は慌てて秀吉の横に並ぶと、

「それで、木下くん、わたしに頼みたい事って言うのは」

「うむ。話したかも知れんのじゃが、ワシは演劇部に所属しておつてのう」

「はい。演劇部のホープだって聞いて……」

葵は秀吉の話に何かに気づいたようで顔は血の気が引いたように真っ青になつていき、

「無理!? 無理です!？」

秀吉が頼み事を切り出す前に逃げ出そうとするが、

「待つのがじゃ」

秀吉は逃げ出そうとする葵の腕をがっちりつかむ。

「ワシは本宮の小説を読んで感動したのじゃ。演劇部のメンバーはワシと同じで演技には自信があるのじゃが、脚本は苦手なのじゃ。本宮の力を貸して欲しいのじゃ」

「無理です。……わたしには荷が重すぎます」

秀吉は葵に頭を下げるが葵は秀吉が手を放してくれないため、廊下にへたり込み泣き始める。

「別に本宮一人に押し付けようとは思ってないのじゃ。力を貸して欲しいのじゃ。清涼祭は演劇部の晴れ舞台なのじゃ」

「で、ですけど、それをわたしのせいで台無しにするわけには」

秀吉は葵に協力して欲しいと言うが葵は絶対に無理だと言う。

「……のう。本宮よ。お主の夢は小説家なのじゃろ」

「……はい」

「ワシは周りからバカにされるかも知れんが演劇で食べて行きたいと思っておる。姉上には無理だと否定されておるがそれでも、ワシの夢じゃ、諦めたくはないのじゃ。夢に向かって歩くのは険しい道を歩かねばならぬ。傷つき倒れてしまう事もあるかも知れぬ。じゃが、ワシは諦めたくはないのじゃ」

「……」

秀吉は優しい笑みを浮かべて葵に言い聞かせるように言う。

第39問

「本宮、お主をワシと同じ夢を志す者として頼むのじゃ。今すぐとは言わぬ。その代わり、せめて、ワシがどれだけ本気か見てくれんかのう。ワシだけじゃない。少なくともうちの演劇部はみな、ワシと同じ夢を持って進んでおる」

秀吉は葵をまっすぐに見て言うと、

「……わかりました。見るだけなら」

葵はどれだけ秀吉が本気か理解したようで小さな声で返事をする。

「それなら、急ぐのじゃ、みなは先に練習を始めておるのじゃ」

「き、木下くん！？ 手、手！？」

秀吉は葵の返事を聞き、嬉しそうに頷くと葵の手を取り駆け出そうとし、葵はいきなり秀吉に手をつかまれた事で顔を真っ赤にすると、

「す、すまんのじゃ！？」

秀吉は慌てて、葵の手をつかんでいた手を放し、

「悪かったのじゃ」

「い、いえ、気にしないでください」

2人で顔を真っ赤にして頭を下げあった後、2人で演劇部の練習場

所に歩き出す。

「……あいつらは付き合い始めた。カップルか？」

「そう言うな。根本、本宮は奥手だしな。秀吉は基本的に女から同性扱いされてるから、免疫がないんだろ」

2人の姿を見かけた恭二はため息を吐くと理音は表情を変える事なく言う。

「……前田、お前、自分の恋愛には鈍感なのに、他のは気づくんだな」

「あの2人がわかりやすいだけだろ。だいたい俺は鈍くはない」

恭二は理音と知り合った時の事を思い出してため息を吐くが理音は表情を変える事なく言い、

「それで、勉強を教えるのは構わんが俺の家で良いのか？」

恭二は召喚大会で優勝するために理音を利用しようとしているのか理音に勉強を教えてくれと頼んでいたようで理音は自分の家で良いかと聞くと、

「家？ 良いのか？」

「ああ、俺は弟を迎えに行かないと行けないしな。少し用事もあるから、7時過ぎにここに来てくれ」

「なら、頼む」

恭二は理音の答えに驚きながら返事をする。理音は恭二にメモを渡す。2人は歩き出す。

第40問

「……凄い」

葵は秀吉達演劇部の練習を見て声を漏らす。

（……木下くんがどれだけ本気かわかるよ。私はどうしたいのかな？）

葵は秀吉がどれだけ真剣に演技をしているかわかったようで自分は秀吉ほど真剣に夢に向かっているかわからないようで顔を伏せる。

「本宮、ワシらの演技はどうじゃった？」

「す、すごかったです。皆さんがどれだけ真剣で……」

秀吉が笑顔で駆け寄ってくると葵は自分がどれだけ夢を甘く見ていたかを知り、目から涙が溢れ出す。

「本宮！？ ど、どうしたのじゃ！？」

『木下、何、泣かせてるんだよ』

秀吉は葵の様子に慌てると演劇部員から葵と秀吉を冷やかす声が聞こえ、

「な、何でもないです。ちょっと、すいません」

「本宮、待つんじゃない？」

葵はこの場から一人で逃げ出し、秀吉は葵の後を追いかける。

『なあ、あれはフラグか？』

『だろうな。あれだけ、可愛くても木下は男だったわけだな』

『……木下が女と付き合いだしたら、うちの学園、暴動が起きるんじゃないか？』

『……ありえる』

葵と秀吉が出て行く姿を見た演劇部員達は彼らなりの言葉で葵と秀吉の背中を生暖かい目で見つめていた。

第41問

「本宮、捕まえたのじゃ」

「……」

「どうして逃げたのじゃ？」

秀吉は葵を捕まえると逃げ出した理由を聞く。

「……木下くんや演劇部の皆さんがまぶしかったです。私が持っていないものを持っていてうらやましかったです」

「どう言う事じゃ？」

葵は秀吉には仲間がいつと一緒に夢に向かって切磋琢磨しているのに対して自分は1人だと言うが秀吉は意味がわからずに首を傾げる。

「すみません。私に演劇部で手伝える事はないです」

「どうしてじゃ？」

葵は秀吉に頭を下げると逃げ出そうとするが、秀吉は納得していないため、葵から手を放さない。

「放してください」

「いやじゃ。納得いく説明をして欲しいのじゃ」

秀吉は葵の顔をまっすぐに見つめて言うと、

「わ、私は最低です……木下くんは私に力を貸してくれて言った時、恥ずかしいと言う気持ちの他に必要とされて嬉しかったんです。今まで、私にはそんな風に言ってくれる人は居なかったから」

「……」

「でも、木下くん達の演技を見て、私が入り込むところなんてなかったんです」

「そんな事はないのじゃ」

葵は演劇部には自分が入り込む隙間はないと言うが秀吉はそんな事はないと言うが、

「ありますよ。私にはそう見えました。そして、私はやっぱり1人なんです」

葵は悲しそうに笑った時、

「本宮は1人なんかではないのじゃ!!」

「き、木下くん?」

秀吉は声を少し大きくして葵を叱るように言い、葵は秀吉の様子に驚いた表情をする。

第42問

「なぜ、1人だと言うのじゃ。明久も理音もお主を仲間じゃと言うておったのじゃぞ。明久は直ぐには気づかなかつたが、理音は4年も離れていたお主をすぐに見つけたのじゃ。そんな理音を、お主は仲間じゃと言わずに自分は1人だと言うつもりか？」

「それは……」

秀吉は葵の自分は1人だと言う言葉に納得が行かずに声をあげると葵は秀吉から目を逸らすと、

「……木下くんにはわかりません」

目に涙を溜めて消えてしまいそうなほどの小さな声で言う。

「何がじゃ？」

「木下くんは私と違ってたくさんものを持っています。私は何も持っていないんです」

秀吉は葵に聞き返すと葵は自分には何もないと言う。

「何を言うておるのじゃ、お主には小説家と言う夢が？」

「小説家が夢？それが本当に自分の夢だと言えるかも自信がないんです。ただ、自分に何もないと認めたくないから言うてるだけです。何もない空っぽの自分が書いたものでも面白いつて言ってくれた人がいたから、その人の優しさに甘えていただけなんです。私に

は何もないんです」

「本宮!？」

秀吉は葵の様子に顔を覗き込むと葵は自分の夢は口だけだと言い、崩れ落ちそうになり、秀吉はそんな葵を支えようとするが、

「木下くん？」

「うむ。やはり、ワシは力不足じゃのう。理音に効率の良い筋トレメニューを作って貰うかのう」

秀吉には葵を支えきれず、葵を抱き抱える形になってしまい、苦笑いを浮かべると、

「本宮には才能があるのじゃ。理音や明久だけじゃなく、ワシも姫路や島田も本宮の小説を読んだみんなはそう思ったのじゃ」

「それは皆さんが優しいから」

葵に言い聞かせるような優しい声で言うが葵は秀吉の言葉を否定しようとする。

「誰も嘘などついておらんのだ。それにワシはどんな事であろうと自分の夢に妥協はしない。演劇部の仲間も一緒なのじゃ。ワシが演劇部の仲間に本宮に手伝いを頼みたいと言った時、みなには本宮の小説を読んで貰った。そうしたら、みな、納得してくれた。違いのう。本宮の本でやってみたいと思ったのだのじゃ」

「……」

「お主は自分に自信がないと言う。それはお主自身が自分と向き合っていないからじゃ」

「それは……」

秀吉が葵は自分と向き合う事から逃げてると言つと葵は目を伏せる。

第43問

「勇気を持って歩み出してみぬか？」

「でも」

秀吉は優しい笑みを浮かべて、葵に言うが彼女は不安そうに目を伏せる。

「本宮だけじゃないのじゃ。誰もが前に進むのは怖いのだ。ワシや演劇部の仲間達、それに理音だってそうじゃ」

「前田くんはない気がしますけど」

葵は理音が不安に思う事などないと言うが、

「そんな事はないのじゃ」

秀吉は苦笑いを浮かべる。

「理音はたぶん、人より強がるのが上手いだけじゃ、表情を崩さずに何事も平然と行っておるように見えるがのう。怜生くんの事やワシは聞いてはおらぬのじゃが、両親との事……不安なところはきくとあるのじゃ」

「……」

「今はそれを明久が埋めているように見えるのじゃ」

秀吉は表情を崩さずに何でもこなす理音にも葵と同じ部分はあると言っ。

「……そうかもしれませんね。でも、前田くんには吉井くんや木下くんがいます。私には」

「さっきも言ったであろう。明久や理音はお主の味方じゃ。ワシや雄二、ムツツリー二、姫路、島田、霧島、工藤も……姉上はわからんのじゃが」

葵は明久や秀吉がいる理音がうらやましいと言っ秀吉は葵を叱るように言っ。

「不安なら不安と言っのじゃ。言っくれねば、ワシらは相談にものってやれぬ。もっと、本宮は言いたい事を言ってよいのじゃ」

「木下くん、迷惑じゃありませんか？」

「友人の相談を迷惑などとは思わぬのじゃ」

秀吉の言葉に葵は不安そうな表情をして聞くと秀吉は笑顔で言い切り、

「辛くなったら、ワシが本宮を支えるのじゃ。だから、ワシとともに進んでみぬか？」

葵に向かい手を差し出すと、

「ふしゅううう！？」

ある意味、告白にも取れる言葉に葵は顔から煙を上げる。

「も、本宮！？ どうしたのじゃ！？」

しかし、秀吉は葵がどうしてこうなったかわからずに慌てる。

第43問（後書き）

どうも、作者です。

葵、秀吉との接触で2度目の熱暴走（爆笑）

秀吉と葵は皆さんにどう思われてるんでしょうか？

お似合い？ 秀吉には明久しか認めない？

第44問

(……どうしたら良いものかのう？ 本宮の事じゃ、今日も1人で掃除をしておるのじやろうし)

「秀吉、何を悩んでるんだ？」

秀吉は葵から協力を得られたため、葵を迎えに行くか悩んでいると、理音が秀吉に声をかける。

「うむ。本宮に演劇部への協力して貰う事には成功したのじゃが、本宮の事じゃ、今日も1人で掃除をさせられおると思つてのう」

「確かにな」

秀吉がため息を吐くと理音は頷き、

「なら、行くか？」

「どこにじゃ？」

「Bクラスに決まつてるだろ」

「理音、待つのはじゃ！？ ワシも行くのじゃ」

表情を変える事なく、当然のように葵を迎えに行くと言い、1人で教室を出て行き、秀吉は慌てて理音を追いかける。

「それで、秀吉、本宮のは揉んだか？」

「お主はいきなり何を言うのじゃ!？」

Bクラスの教室に向かう途中で、理音は突拍子もない事を秀吉に聞き、秀吉は顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつける。

「……ヘタレ」

「わけのわからぬ事を言うでない。だいたい、本宮は……」

理音は秀吉の反応にため息を吐くと秀吉は葵が好きなのは理音だと言いかけるが、言葉を飲み込む。

「……秀吉、自分のなかにあるものを飲み込まずに素直に出したらどうだ？」

「な、何を言うておるのじゃ？」

理音は相変わらず、自分以外の恋愛感情には敏感なようであまりため息を吐くと秀吉は反論しようと思いをあげるが、

「そうやって、お前は『木下 秀吉』を演じるつもりか？ たまにはお前のなかにある自分^{もの}を見せたらどうだ？」

理音は表情を変える事なく、秀吉に本心を見せろと言う。

「お主は何を言うておるのじゃ？」

「……もう少し、ワガママを言えと言う事だ。本宮は原石だ。研ぐだけ研いで、横からかさわれるなよ」

秀吉は理音の言葉の意味がわからないと言うと理音はため息を吐き、

「本宮、いるか？」

「前田くん！？ 木下くん！？」

Bクラスの教室のドアを開けると葵はクラスメートに掃除を押し付けられそうになっている。

「根本、本宮は掃除当番か？」

「いや、今日は違うな」

理音は恭二に葵が掃除当番かを確認し、恭二は葵は掃除当番ではないと答えると、

「行くぞ。秀吉」

「うむ」

「えっ！？ えっ！？ 前田くん！？ 木下くん！？ 何があつたんですか？」

理音と秀吉は葵を引きずって歩き出し、葵は意味がわからないまま、2人に引きずられて演劇部に向かう。

第45問

「結構、さまになってるじゃないか」

「そうね……」

理音は1度、学園長室で召喚システムの調整をした後、演劇部に様子を覗きに顔を出すと理音についてきた優子是不機嫌そうな表情で言う。

「なんだ？」

「別に……なんで、あたしがいるのにあんたはあの子の事を気にしてるのよ？」

「なんだ？ ヤキモチか」

「う、うっさいわよ」

理音は表情を変える事なく、優子に言うとう星を刺された優子は頬を膨らませると、

「本宮は俺が欠落してもそばにいてくれた。数少ない友人なんだ。たぶん、アキとあいつが俺を見捨てていたら、今、俺は生きてはいない」

「特別なんだ」

「ああ」

理音は表情を変える事なく言うと、優子は自分の知らない理音を知っている明久と葵に嫉妬しているように見える。

「……お前は俺を信用しないのか？」

「信用？　だつて、あんた、あの子の胸は間違いなく好みでしょ？」

「ああ、もちろん、揉みたいが、あれを揉むとお前だけではなく、秀吉にも怒られるからな。止めておく」

優子は理音が『自他共に認める巨乳好き』のため、信用できないとジト目で睨むと理音は揉みたいと言う事は否定しない。

「……ねえ。なんで、秀吉が出てくるの？」

「お前はずっと秀吉のそばにいるのに気づかないのか？」

優子は理音の言葉に首を傾げるが、理音はため息を吐くと、

「1つ聞いて良いか？　優子、お前は秀吉の初恋の相手はわかるか？」

「ちょっと待つてね……吉井くんかな？」

優子に秀吉の初恋の事を聞くと優子はしばらく考えた後、明久だと言っ。

「……お前は自分の弟まで趣味の対象にするのか？」

「ちがつ！？ 違うわよ！？ 秀吉は吉井くんの前だと顔を赤くしたり、おかしい反応するからよ」

理音はため息を吐くと優子は慌てて否定する。

「まあ、秀吉の反応にも問題はあるが、基本的にあいつは女から異性として扱われなかったから、あまり、そう言うのを考えないで生きてきたんだろ。だから、自分を異性と見てくれる本宮が特別に見える」

「それって、秀吉があの子の事を好きになってるって事？」

理音の言葉に優子は驚いたような表情で言うと、

「だろうな。自分の想いをすぐに認めようとしないあたり、双子だな」

理音は優子を見て、くすりと笑い、

「帰るぞ。怜生を迎えにいかないといけないからな」

「う、うん」

2人は並んで演劇部の部室を後にするが、秀吉と葵は真剣に取り組んでいるためか理音と優子に気づく事はない。

第46問

（もう、こんな時間、早く帰らないと）

葵は演劇部の練習を終えて片付けを終わらせ、時間を確認するとすでにだいぶ遅い時間になっているため、

「あ、あの」

「本宮、少し待っていてくれんかのう。いきなり、演劇部を手伝わせたのでのう。遅い時間になってしまったし、ワシが家まで送るのじゃ」

近くにいる演劇部員に帰る事を伝えようと声をかけようとすると秀吉が葵に声をかける。

「えっ！？ えと、そんな、気にしないでください」

「ダメなのじゃ。明日からもこの時間になってしまふからのう。きちんと本宮の御両親に話をせぬといけないのじゃ」

葵は秀吉の言葉に慌てて断るが秀吉は葵が遅くなった理由を説明しに行くと言う。

「で、でも」

『木下、お前が送ると美少女が2人になるから、変質者に襲われるぞ』

「ワシは男じゃ!？」

葵は秀吉の善意を断りたいがキチンと言い出せずにいると他の演劇部員から茶々が入り、秀吉は演劇部員達とじゃれあい始め、

(……今のうちかな?)

葵は秀吉に何も言わずに逃げ出そうとした時、

「葵ちゃん、秀吉、部活は終わった? 一緒に帰らない?」

「良かった。まだ居てくれました」

ドアが開き、明久と瑞希が顔を出す。

「吉井くんに姫路さん? どうして?」

「葵ちゃん、どうかした?」

2人の登場に葵が首を傾げると明久は葵に聞き返す。

「い、いえ。もう遅い時間なのにお2人はどうしたのかな? って」

「私達は清涼祭でのクラスの出し物の準備ですよ。私の担当していた作業が遅れて、吉井ちゃんと美波ちゃんに手伝って貰ってました」

葵の疑問に瑞希は申し訳なさそうな表情をすると、

「そつなんですか? ……島田さんは?」

「美波なら、鉄人に今日の作業が終わったって報告しに行ったよ。美波はうちのクラスの実行委員だから、で、校門前で待ち合わせ」

「うむ。待たせてしまったかのう？」

葵は美波の居場所を聞くと明久は美波と待ち合わせしていると話しているに着替えを終えた秀吉が合流する。

「秀吉、お疲れさま」

「うむ。明久、姫路、すまん。う。ワシも手伝えれば良かったんじやが」

「気にしないでよ。僕は副実行委員だしね。それに秀吉は演劇部があるんだからさ」

秀吉は自分がクラスの喫茶店を手伝えなかった事を謝ると明久は笑顔で言い、

「それに、ちょっと前までリオと秀吉のお姉さんも手伝ってくれたしね。怜生くんを迎えに行かないといけない時間になったから、先に帰っちゃったけど」

「姉上がか？ 珍しい事もあるものじゃ」

秀吉は優子がFクラスの喫茶店の準備を手伝ったと聞いて首を傾げるが、

『木下、本宮、そろそろ、鍵かけるから出てってくれ』

演劇部部長から声をかけられ、

「歩きながら話しましょうか？」

「そうじゃな」

4人は美波と待ち合わせをしている校門前に向かう。

第47問

「葵、演劇部はどう？」

「あつ！？ はい。えーと……」

美波と合流して下校途中で美波が葵に演劇部の事を聞くが葵は黙ってしまふ。

「ねえ。アキ、ウチ、おかしな事を聞いた？」

「それは美波の狂暴性がこわ……あだだだ！？ 胸がないから肋骨が！？」

「……」

明久は美波のお怒りを買い、関節技をかけはじめ、葵は2人の様子を見て顔を青くしている。

「島田、止めるのじゃ。見なれない人間はさすがにひくのじゃ」

「み、見なれないって、いつもなんですか？」

秀吉はため息を吐きながら美波をいさめると葵は明久がいつも美波に関節技をかけられている事を聞き、顔をひきつらせる。

「そうね。それで、木下、葵は演劇部に馴染めそう？」

「そうじゃのう。ワシは馴染めておったと思うのじゃ」

「そっか。良かったわね」

美波は明久から手を放すと秀吉に葵の様子を聞き、秀吉が頷くと美波は嬉しそうに葵の肩を叩く。

「は、はい」

「……」

葵は美波の態度に緊張したように頷くと秀吉は葵の様子に眉間にシワを寄せると、

「秀吉、葵ちゃんはまだ馴染めてないんだね？」

「うむ。まだ2日目なのじゃ。仕方ないであろう」

明久は葵と秀吉の様子に葵がまだなれていない事に気づくと秀吉は小さく頷く。

「秀吉、何かあったら、ボクにも教えて」

「うむ。明久、お主と言い、理音と言い。ずいぶんと本宮の事を気にしておるのう」

明久の言葉に秀吉は疑問に思った事を口にする、

「そりゃあ、友達だからね」

「そうか」

明久は笑顔で言い切り、秀吉はそんな明久の様子に少しホッとする。

「アキ、木下、何してるのよ。行くわよ」

「うむ。明久」

「うん」

美波は立ち止まっていた秀吉と明久に声をかけると2人は3人を追いかける。

第48問

「葵ちゃん、秀吉、また明日ね」

明久と瑞希と別れ、葵と秀吉は2人つきりになると、

「……」

（……まったく、理音が余計な事を言うから何を話たらよいのかわからぬのじゃ）

葵は自分から話すようなタイプではないため、秀吉が葵に話しかけようとはするが、理音の言葉が引っかかり何も言い出せず、2人の間には沈黙が続いている。

「あの、木下くん」

「な、な、なんじゃ!？」

しばらく歩いていると葵が秀吉を呼び、秀吉は驚き声を裏返す。

「……すいません。私と2人じゃつまらないですよね」

「そ、そんな事はないのじゃ!？」

葵は会話がないのは自分が暗いせいだと思っており、うつむきながら言つと秀吉は慌てて否定し、

「理音からおかしな事を言われてのう。その事を考えてしまったの

じゃ。それにワシの方こそすまんのじゃ。あまり、女子と2人言うのはなかったのう。何を話して良いのかわからぬのじゃ」

秀吉も女子と2人と言うのは経験がないと困ったように笑う。

「そうなんですか？ 木下くんはきれいだから、女の子から告白とかされてるんじゃないんですか？」

「……残念ながら、そんな経験はないのじゃ。なぜか、ワシは女の子から異性と意識されないようでのう」

葵は意外だと言う表情をすると秀吉は自分は女の子から異性扱いされてないと自覚しているようで落ち込んで行き、

「あ、あの！？ ご、ごめんなさい！？」

「……謝らないで欲しいのじゃ、余計に落ち込むのじゃ」

葵はそんな秀吉を見て頭を深々と下げて謝ると秀吉はため息を吐く。

「で、でも、木下くんはきれいですし、優しいですし、直ぐに彼女さんができますよ。木下くんだって好きな人が居るんですよ？」

「好きな人？ ……」

葵は秀吉を励まそうと慌てて言うと言秀吉は葵の言葉と理音の言葉が重なり、葵の顔を直視できなくなり、顔を真っ赤にしてうつむく。

「木下くん、私、何か木下くんの気に障る事を言いましたか？」

「ち、違っのじゃ！？ い、いきなりじゃったので、ワシにもいろいろとあるのじゃ！？」

葵が不安げに秀吉の顔を覗き込むと秀吉は顔を真っ赤にして何もな
いと言つと、

「す、すまぬのじゃ！？ ワ、ワシは急用を思い出したのじゃ！！」

「は、はい。それじゃあ、明日もよろしくお願いします」

「う、うむ」

秀吉は葵から逃げ出すように駆け出す。

第49問

「それで逃げ出してきたのか？」

「ヘタレだな」

秀吉は葵から逃げ出すと家に帰らずに理音の家に行くと理音となぜか理音の家に居る恭二にヘタレ扱いされる。

「う、うるさいのじゃ！！ だいたい、根本、お主がなぜここにいるのじゃ！！」

「俺は前田に勉強を見て貰ってるんだよ。なんか文句あるか？」

秀吉は恭二に向かい言々と恭二はため息を吐きながら、理音に召喚大会のために勉強を見てもらっていると言う。

「まあ、2人とも落ち着け。それで、秀吉、お前は結局はどうしたいんだ？」

「どうしたいとはどう言う事じゃ？」

理音は表情を変える事なく紅茶を秀吉の前に置くと秀吉に葵の事を聞くが秀吉は未だにどうしたいのかわからないように肩を落として言う。

「……前田、こいつは本当に大丈夫なのか？」

「仕方ないだろ。性別が秀吉なんだから」

恭二は煮え切らない秀吉の様子にため息を吐くと理音はため息を吐き、

「秀吉、学校で言った事をもう1度、言うぞ。本宮は原石だ。お前がはつきりとしないとあいつは誰かに横からかつさらわれるぞ」

秀吉に向かい言う。

「しかし、ワシは……」

「なあ。前田、先にはつきりさせた方が良くないか？ 今の木下はこの間、俺とお前が屋上であった時と一緒にじゃないのか？」

恭二は秀吉の様子にまずは秀吉の気持ちをはつきりさせようと言うと、

「そうだな。秀吉、お前は本宮とや……」

「……だから、前田、お前は少し言葉を選べよ。木下、お前はあの地味女の事をどう想ってるんだ？ クラスの姫路と島田と同じように感じてるのか？」

理音はドストレートで秀吉に言おうとするが恭二が理音の口を塞ぎ、秀吉に聞く。

「……姫路や島田とは違う気がするのじゃ。本宮の泣きそうな顔を見てるとこの辺がチクチクと痛むのじゃ。本宮には笑って欲しいのじゃ」

「……どうして、そう思うかわかるか？」

「……それがなぜかわからんのじゃ」

秀吉は未だに葵が好きな事を自覚していないようで困ったように笑う。

「……なあ、前田、俺は事実を突きつけて良いと思うか？」

「……そうしてやってくれ」

恭二は秀吉の鈍さにこめかみを押さえると理音はため息を吐きながら頷く。

「木下、お前があの地味女を気にするのはお前があの地味女に惚れてるからだ。それくらい気づけよ。お前と良い、前田と良い何なんだよ」

「根本！？ い、いきなり何を言うのじゃ！？ ワ、ワシは本宮の事など！！」

「なら、動揺するな」

恭二は疲れたと言いたげに秀吉が葵に惚れてると言う秀吉は顔を真っ赤にして否定するが理音は秀吉に落ち着けと言う。

第50問

「ワシは落ち着いておるのじゃ!!」

「知ってるか。木下、落ち着いてる人間には落ち着けとは言わないんだ。それと気にしてないって言うなら、ここで地味女が嫌いと言え」

秀吉は恭二から聞かされた言葉を動揺しながらも否定しようとする
と恭二はそれならはつきりと否定するように言う。

「そ、それは……」

「できないんだろ? …… ったく、答えなんて出てんじゃねえかよ。
なんで認めたくないんだよ」

しかし、秀吉は葵が嫌いだとは言う事が出来ずに目を伏せてしまい、
恭二はそんな秀吉を見てため息を吐く。

「……それは、本宮には好きな男がいるのじゃ」

「……なあ。秀吉、1つ聞くぞ」

「う、うむ。なんじゃ?」

秀吉は葵が理音を好きな事を知っているため、どうしたら良いかわからない部分もあるようで下を向くと理音が秀吉に声をかける。

「お前の初恋はいつだ?」

「い、いきなり、どうしたのじゃ？」

「それらしいのはなかっただろ。優子も知らないと言ってたしな」

「……うむ。言われるとあったかわからんのじゃ」

理音は先ほど優子に聞いた秀吉の初恋について本人に聞くと秀吉は意味がわからないようで首を傾げると理音は念を押すと秀吉は気まずそうに頷く。

「……なあ、前田、こいつは大丈夫なのか？」

「俺が言つのもなんだが恋愛なんて、人それぞれだろ」

恭二は何度目になったかわからないため息を吐き言つと理音は表情を変える事なく言い、

「秀吉、本宮が俺を好きだと思ってるのはあいつの勘違いだ。あいつの俺への想いは恋愛と言つよりは親兄弟相手の情愛に近い」

「……おい。前田、お前はいろいろと考える」

理音は恭二がいる事など気にする事なく、葵が自分の事を好きだと言つと恭二は眉間にシワを寄せるが、

「事実だからな。今は秀吉に説明しないといけないんだから気にするな」

「……気にするなって言つてもな」

理音の表情は変わる事なく言い切ると恭二はどうして良いかわからない表情をして言う。

「理音、なぜ、根本があるのにその話を、こやつは」

「秀吉、睨むな。俺も根本が卑怯な手を使うとは聞いた事がある。しかし、今回に関しては問題ない。こいつが真面目に……」

「前田、余計な事を言うな。まあ、今はそんな気分じゃねえしな。それに俺はお前らFクラスのバカどもと違って前田を敵に回すような愚策は取らねえよ」

秀吉は葵の弱みを恭二に聞かれたため、恭二を睨みつけるが理音は秀吉が心配してる事にはならないと言い、恭二は葵を脅すと理音を怒らせると理解しているようでため息を吐く。

第51問

「しかし……」

「しつけないな。だいたい、あの地味娘は同じクラスなんだ。脅したって、使えないだろ」

秀吉はまだ納得がいないうで恭二を睨みつけるが恭二はため息を吐く。

「続けるぞ。あいつが俺を好きだと勘違いしている原因はたまたま、俺とアキがいじめられてたあいつを助けたからだ」

「いじめ？ 確かにな。ガキの頃から、あんなうじうじしてればいじめられても仕方ねえよ」

理音が葵と出会った時の事を思い出して言うと恭二は葵の性格ならいじめられて当然だと言う。

「まあ、女は知らないが男はガキだから、あいつをいじめてたんだろうけどな」

「それはどう言う事じゃ？」

理音の言葉に秀吉は首を傾げると、

「察しが悪いな。あいつはガキの頃はそれなりに人気があっただよ。大人しくて守ってあげたくなるような女の子」

「あれか？　好きな娘をいじめたくなるヤツだろ。ガキくせえな」

「仕方ないだろ。当時はガキなんだからな」

理音の言葉に恭二はため息を吐くが、

「なぜじゃ！！　好きなら、なぜ、本宮に誰も優しくしないのじゃ」

秀吉は小学生の男の子の考えがわからないように声をあげる。

「簡単な事だ。誰も前に出る勇気がないんだよ。身をていしてあいづを守るのが怖かった。友人を裏切れなかったんだよ。そこに飛び込んだのがアキだ」

「なあ、それなら、地味娘はなんで吉井にいなかったんだ？」

理音の言葉を聞いて恭二が首を傾げると、

「後は周りの問題だ。アキは周りに人が集まる。俺にはあの頃はアキ以外は近寄ってこなかったからな」

「……いじめられて人見知りか。１人でお前に親近感を持ったんだろうな」

理音の言葉に恭二は頷く。

「そう言う事だ。俺の近くにいれば男にはいじめられないからな」

「じゃが……」

「あいつはその居心地の良さを恋愛とすげ替えたただけだ」

秀吉は納得いかないようだが、理音は葵の自分への想いは恋愛ではないと言い切る。

「理音、お主はなぜ、そんな事を言えるのじゃ。本宮は本気でお主の事が好きなのじゃぞ!!」

「……仮にそうだとして、俺にどうしろと言っんだ。俺はこの間から、優子と付き合ってるんだぞ」

秀吉は葵の気持ちを大切にしろと理音につかみかかるが、理音は秀吉の手を払うとため息を吐きながら優子と付き合い始めたと言い、

「……いつからじゃ!?!」

秀吉は理音の言葉に一瞬、呆けた後、驚きの声をあげる。

第51問（後書き）

どうも、作者です。

少しだけ見えた理音の過去。

なぜ、番外編で伏線を張る？（苦笑）

まあ、番外編を見てくれる事で本編を膨らませるのも必要かな？と。

そして、番外編で秀吉にだけ、先に優子と理音が付き合い始めたと報告です。

他のメンバーには清涼祭までバレません。（苦笑）

理音と恭二は友人に見えてるのかな？

恭二は嫌われてるキャラクターだから、ちょっと不安です。

第52問

「ん？ お前のうちに泊まった次の日からだ。気づいてなかったのか？」

「しかし、あの日はお主はデータ収集じゃ、なんじゃっておったではないか！？」

「良いか。秀吉、それはそれだ」

驚きの声をあげる秀吉とは対称的に理音は冷静に言うと、

「だから、本宮がいくら俺を好きだと言っても俺は断るしかできないぞ。それともお前は俺に二股をかけると言うのか？」

「言っわけないであろう！？」

理音は無表情のまま聞くと秀吉は当然、声をあげる。

「なあ、秀吉、お前はここまであいつのために声をあげているのに、まだ自分の気持ちを認めるのが怖いのか？」

「……」

「恋愛はお互いの気持ちがあるから一方的はない。そのまま、自分の想いを認めないでいて、あいつが先を歩き出した時、今のままだとお前があいつにおいて行かれるぞ」

理音はまっすぐに秀吉に言う。秀吉は理音から視線を逸らす。

「なら、ワシはどうすれば良いのじゃ？」

「知らん」

秀吉は理音に聞くが理音は秀吉を突き放し、

「それはワシには……」

「勘違いするな。お前が自分の気持ちを認めようとしなければ、俺はお前に協力はしない。お前があいつと先に進みたいと言うなら協力をしてやるし、認めないなら、今まで通り、本宮の人見知りが治るように協力するだけだ」

秀吉は理音に見捨てられたと思い、この場から逃げ出そうとするが、理音は秀吉にもう1度、葵との事をどうしたいか秀吉に聞く。

「なあ、木下、はっきり言えよ。さっきはあれだけ、地味娘の笑ってるのを見たいと言ったのは嘘か？」

「嘘ではない……ワシはもっと本宮の笑った顔が見たいのじゃ」

恭二が秀吉に白状しろと言うと秀吉はようやく自分の気持ちを認めるが、

「違うだろ。自分にだけ笑いかけて欲しいんだろ？」

理音は秀吉をからかうように笑う。

「そうじゃ。ワシがそんな事を言ったら悪いのか!？」

「別に悪くない」

秀吉は顔を真つ赤にして言うと言音はくすりと笑い、

「とりあえず、アキ達にバレると暴動になるから、ここで対策でも立てるか？」

「……俺を巻き込むな」

「乗りがかった船だろ」

恭二に秀吉と葵をくつつけるのに協力しろと言う。

「頼むのじゃ。根本は彼女がおるのであろう。ワシに協力して欲しいのじゃ」

「……はあ。俺のキャラじゃないんだが、前田には借りがあるしな」

秀吉は自分ではどうしたら良いかわからないため、友香と付き合い合っている恭二なら何か良いアドバイスをくれると思ったように頭を下げると恭二はしぶしぶ頷く。

第53問

「……」

「肩に力が入りすぎだ」

秀吉は今日は1人で葵を迎えにBクラスに行こうとするが、緊張している姿が目に見え、理音に後ろから頭を叩かれる。

「り、理音、何をするのじゃ!？」

「何をするじゃないだろ。そんなガチガチの状態で迎えに行ったら、本宮に伝染するぞ」

秀吉は理音に叩かれたのが痛かったようで涙目で理音の顔を見上げると理音はため息を吐き、

「俺は今日もばあのところに行かないといけないからな。何もしてやれないからな」

「う、うむ。わかっておるのじゃ。それにお主がいると……」

上手くやるように言つと秀吉は頷きながらも理音と葵を会わせるのは避けたいようで頷く。

「1人前に独占欲か？」

「う、うるさいのじゃ!？ ワシがそんなものを出してはいけないのか!？」

理音は秀吉の様子にイタズラな笑みを浮かべると秀吉は頬を膨らませると、

「怒るな。お前はそれで良いんだよ。お前は優子の影響でどこか前に行くのを抑えるからな。もう少し、強気に出ても良いんだ」

「うむ。気をつけるのじゃ。それでは、時間もあるから、ワシは行くのじゃ」

理音は理音なりの言葉で秀吉の緊張をほぐすと秀吉は大きく深呼吸をした後、教室を出て行く。

「さてと、俺も行くか？」

「理音、秀吉はどうかしたのか？」

秀吉の背中を見送った後、理音は学園長室に行こうとすると雄二が理音に声をかける。

「ん？ 少し、あいつに本宮の事を頼んでいてな。その話をしてんだ」

「そうなのか？」

「ああ。本宮に自信を持たせるためにな。演劇部から協力要請と言う形にして自信を持たせようとな」

理音は雄二に秀吉の葵への想いを伝えずに葵に自信を持たせるために演劇部に協力して貰っていると言う。

「なるほどな。確かにあそこまでの話をかけるなら、演劇部でも重宝するだろうしな。上手く行けば良いな……秀吉と」

「……気づいていたか」

雄二は納得している様子で頷くが、秀吉の葵への想いに気づいていたようでニヤリと笑い、理音は雄二の反応にため息を吐くと、

「アキや他のヤツに話すなよ。暴動になるから」

「確かにな」

雄二に口止めをすると雄二は苦笑いを浮かべながら頷く。

第54問

「……本宮はおるかのう？」

秀吉が葵を迎えにBクラスの教室を覗くと葵の姿はない。

「……根本、本宮はまたどこかの掃除に？」

「いや、今日は違う。さっき、他の演劇部のヤツが迎えにきたみたいだぞ」

秀吉が恭二に葵の居場所を聞くと他の演劇部員がきていたと言うと、

「う、うむ。それではワシも部室に行ってくるのじゃ」

秀吉は慌てて演劇部に向かおうとする。

「木下、慌てなくても本宮を連れて行ったのは女だぞ」

「な、何を言っておるのじゃ!？」

恭二は秀吉の様子にため息を吐き、秀吉は声をあげると、

「……良いから行け」

恭二はため息を吐く。

「うむ。それでは根本、世話になったのじゃ」

「ああ、あまり、慌てるなよ」

「うむ。気をつけるのじゃ」

秀吉は恭二のやる気のなさそうな応援に返事をして演劇部に向かう。

「えーと、失礼します」

『本宮さん、そんなに緊張しなくても良いよ』

葵はあまり話した事のない演劇部員が迎えにきたため、緊張した様子で部室に入ると部員は葵の様子に苦笑いを浮かべると、

『ねえねえ。本宮さん、木下くんとはどうやって知り合ったの?』

「えーと、共通の友達が居まして……」

『ほほう。友人からの紹介か』

女子部員達の興味は葵と秀吉の関係を聞きたいようである。

『で、昨日、木下くんが送ってくれたんでしょ……何か進展があった?』

「進展ですか? ……な、な、何を言ってるんですか!?! 私と木下くんとはそんな関係じゃないです!?!」

葵は演劇部員が自分と秀吉の関係を勘違いしている事に気づき声をあげると、

『本宮さん、かわいい』

「ふえっ!？」

2名の女子部員は慌てる葵がツボだったようで葵に抱きつき、葵は驚きの声をあげるなか、

『……木下くん、もっと頑張らないといけないね』

『性別秀吉だから、男に見られてなかったんだろ』

他の演劇部員はため息を吐く。

第55問

「……お主らは何をやっておるのじゃ？」

秀吉は平静を装いながらも演劇部の部室に入ると、

『『『ヘタレ』』』

演劇部員のほとんどは秀吉が葵に惚れている事に気づいているため、秀吉を見てため息を吐く。

「お、お主らはいきなり何を言うのじゃ!？」

『この間から見てればだいたいの人間は気づく』

『木下、時間がないんだ。さっさと用意しろよ』

秀吉は部員達の言葉に顔を真っ赤にして声をあげるが、部員達は練習を始めるから早くしろと言い、

「う、うむ」

顔を赤くしたまま頷く。

『あんだ達も本宮さんを解放しなさい。始めるわよ』

『ええ!？ もっと、本宮さんで遊びたい』

「きゅうう!？」

『……目を回してるぞ』

葵で遊んでいる部員達にも声をかけると抱きつかれてもみくちやにされた葵は目を回しており、

「本宮、大丈夫か!？」

秀吉は慌てて葵に駆け寄ると、

『とりあえず、休ませて置きましょう。あんた達、反省しなさいよ。木下くんも自分のやるべき事をやる事』

『はい』

『反省してるなら、きちんと返事』

『はい』

先輩部員はため息を吐きながら指示を出して行き、

『木下くんも』

「し、しかし」

『あなたがついててもどうにもならないでしょ。それに本宮さんを彼女にできれば清涼祭や本宮さんも自信はどつても良いの?』

「良くないのじゃ」

『わかったなら、やるわよ』

先輩部員は秀吉の返事を聞いて満足そうに笑うと、

『木下くんの恋愛は一度置いといて本宮さんみたいに脚本ほんぽんをかける人間は貴重なの。清涼祭を成功させて本宮さんを演劇部に引き入れるよ。気合い入れて』

葵の事を演劇部員達は評価しているようで、秀吉や理音の考えていた速さより速いスピードで葵を演劇部に引き入れる計画が動き始める。

第56問

「……うーん？ あれ、私……」

葵が目を覚ますとすでに演劇部の練習が始まり、部員達の妥協のない意見がぶつかり合っている。

（……私がいる必要ってあるのかな？）

葵は自分が気を失っている間に始まった練習には自分が入る余地などないと思ったようで目を伏せてしまうと、

『本宮、目を覚ましたならこっちで感想聞かせて』

「えっ!？」

先輩部員が葵に気づいて手招きをするが葵は一步を踏み出せずにいる。

『本宮、清涼祭での演技は私達だけじゃない。あんたの作品でもあるんだ。本を書いたあんたが思う事を言ってくれなきゃ、あたし達は困るよ』

「は、はい!？」

先輩部員が葵の反応にため息を吐くと葵は慌てて先輩部員の元に駆け寄り、

『最初から、通すよ。本宮、しっかりと頼むよ。木下、さっきみた

いに気の抜けた演技したら、前田から怪しい薬を貰ってきて飲ませるよ』

「う、うむ。わかったのじゃが……先輩、なぜ、理音が出てくるのじゃ？」

先輩部員は葵の事が気になり集中していなかった秀吉に理音の薬をちらつかせて発破をかけると秀吉は理音と先輩部員の繋がりに首を傾げる。

『決まってるでしょ。使えるからよ。まったく、なんで2年には木下とか本宮とか前田とか才能の塊がゴロゴロと転がってるのよ』

「……あやつの交友関係がまったくわからんのじゃ」

理音は先輩部員とどこかでつながっているようで秀吉は理音の交友関係にため息を吐くと、

『木下、始めるよ。本宮、あんたは話すの苦手なんだから、思った事を全部書き出して』

「は、はい!？」

「うむ」

先輩は葵がネガティブになる前に指示をだし、練習を再開させる。

第57問

(……………ここはこう直した方が、でも、それだどこっちを……………)

葵は先輩部員の言う通り、気づいた点をノートに書き出し始めると集中し始めたようで黙々と気づいた点をノートに書きだめて行く。

『よし。本宮……………へえ』

流しでやった演技も終了し、先輩部員は葵の様子に感心したように頷くと、

『10分、休憩。本宮の話を聞いたら、もう1度、最初からね』

休憩の指示を出す。

(……………木下くんの声は良く通るから、それなら、こうして印象づけた方が良いかな？ でも、それなら……………)

『木下、今、声をかけるんじゃないよ』

「う、うむ」

秀吉は葵に話しかけようとして先輩部員に止められて少しバツが悪そうな表情をすると、

『今のあの娘は必死に考えているんだ。あんたの性格上、本宮を誉める事しかないでしょ。あんたと前田くんが考えたのは荒療治なんでしょ？ 今はあの娘から言いたい事を聞き出して、あたし達と

意見をぶつけ合う事が重要な。その後のフォローがあんたの役目。わかる？』

「う、うむ」

『しかし、木下も本宮も良い友達を持ったわね。ここまでしてくれるのいないわよ』

先輩部員は秀吉に言い聞かせて、秀吉と葵の交友関係を誉める。

「ワシもそう思うのじゃ。理音も明久も姫路や島田も本宮を心配しておるし、何より、本宮の才能を信じておる……」

『木下もでしょ。あたし達だって、あの娘の才能が非凡だって事はわかる。だけどね。ずっと演じてきた意地つてのもあるのよ。だから、あたし達にも意地であの娘が潰されようが知らないわ。そうならないようにあんたがちゃんと支えなさい。ワシは男じゃって言う言葉が口先だけじゃないところをちゃんと見せるのよ』

「う、うむ」

先輩部員は秀吉に気合いを入れるために彼の背中を思いっきり叩くと秀吉は返事をするが、背中が少し痛かったようで目には少し涙がにじむ。

第58問

『それじゃあ、本宮』

「は、はい！？……」

先輩部員は葵に練習を見て気づいた点を話せと言うと葵は返事をした後、何も言わずに黙り込んでしまい、

『……仕方ないね』

「あつ！？」

『時間がないんだから、あたしから言うよ。まずは……』

先輩部員は葵の考えを書き留めたノートを取り上げると葵が感じた事やセリフの変更などが次々と発表される度に、演劇部員の顔は陰しくなっていく、

(……あつ)

葵は部員達の様子に自分が余計な事をしたと思い顔を伏せる。

『……まあ、一通り、発表させて貰ったんだけど、これはあくまでも本宮の意見だよ。他に意見がある人間は？』

『それじゃあ……』

先輩部員は他の部員にも意見を聞くと部員達は葵の意見への反対意

見、賛成意見を討論し始めるが誰も葵を責めるような事は言わずに、

（あれ？）

葵は責められと思っていたため、何があつたかわからない様子である。

「本宮、呆けてないで聞くのじゃ。お主の意見へのそれぞれの意見を論じているのじゃ。人の意見が聞ける貴重な機会じゃ。皆の意見が出るのじゃ。ちゃんと聞いておかぬと損をするのじゃ」

「はい！？」

秀吉は呆けている葵に声をかけると葵は慌てて返事をする。

『本宮、木下、聞いてるのかい！！ 本宮、あんたはまともに意見を言えないんだ。ちゃんと考えをまとめておきな。木下、あんたの意見をさつさとだす』

「は、はい！？」

集中していない2人へ、先輩部員が声をあげると2人は慌てて返事をし、葵は先輩部員の言葉に慌ててノートに向かい、秀吉は自分の意見をあげる。

第59問

(……凄い。さっき、話したばかりの事を実行しようとしてる)

葵は先ほどの討論の後に部員達の演技が変化している事に感動しているようである。

(……どうして、すぐにあんな風にできるんだろう?)

しかし、自分は討論の時に何も言えなかったためか落ち込み始め背後には重苦しい空気が漂いだす。

『……木下、本宮って割とわかりやすいよな?』

「うむ。感情がすぐにでるのは悪い事ではないのじゃが、あれは周りに影響がでそうじゃの」

葵が落ち込んでいる間に演技は終わり、秀吉と男子部員達が葵の様子に苦笑いを浮かべた時、

『それじゃあ、時間も時間だから、今日は終わり、片付けるよ。本宮、落ち込んでいるヒマがあつたら動きな。うじうじしているとマイナスイメージしかわかないよ』

「は、はい!？」

先輩部員から葵へ指示が飛び、葵は声を裏返して返事をするが、

『木下、本宮と一緒にいてやれ』

「う、うむ」

葵はどこに行ったら良いのかわからずにおたおたしており、男子部員の1人が秀吉の肩を叩くと秀吉は葵の元に歩き出し、

「本宮、こつちを手伝って欲しいのじゃ。どこに何があるかも一緒に教えるので覚えて欲しいのじゃ」

「は、はい!？」

葵に自分と同じところを片付けようと言うと葵の手を引いて行く。

『ほう。そうくるか?』

『いま、本宮が声を裏返したのは木下に手を引かれたからか?』

『……いや、まずは木下が男扱いされてるか判断しないといけないから保留だろ』

『やっぱり、ネックは性別秀吉か?』

男子部員は葵と秀吉の様子を見てこそこそと話し出した時、

『あんた達、遊んでない』

先輩部員から怒鳴られ男子部員は四散して行く。

第60問

「それで、一緒に帰っただけか？」

「ヘタレだな」

「うるさいのじゃ！？　　と言っか、なぜ、今日は雄二なのじゃ！？」

秀吉は葵を家まで送り届け、理音の家に顔を出すと今日は恭二ではなく、雄二が居間に座っている。

「なぜ？　お前も知ってるだろ。俺も明久も理音に勉強を見て貰ってるんだ」

「パソコンまで借りたんじゃ。家でやっておれば良いじゃろ」

雄二は理音から借りたパソコンに入力をしながら言々と秀吉は不満そうな表情で言う。

「家でやると邪魔が入るそうだ」

「翔子が『勉強なら私が教える。私に勉強を聞かないのは理音が浮気相手？』とかわけのわからない事を言い出してな。こいつを壊されそうになってな。壊されたら弁償できる気はしないからな……おし、最高得点じゃないか？」

「やはり、お前は覚えが良いな」

雄二は家で一人で勉強をすると翔子からの襲撃があると言いながら

も確実に理音が用意した問題を終わらせている。

「それで、本宮は上手く溶け込めそうなのか？」

「うむ……」

「雄二なら、知っているから、気にするな」

秀吉は雄二がいるところで話して良いものか考えるが理音は雄二もすでに秀吉が葵の事を好きだと知っていると言つと、

「なぜなのじゃ！？　り、理音、お主、雄二に話したのか！？」

秀吉は理音が雄二に話したと思ったようで理音につかみかかる。

「俺は話していない」

「それくらいは気づくだろ。姫路や島田と一緒に前もわかりやすいんだよ」

理音は表情を変える事なく、秀吉の手を払つと雄二はため息を吐く。

「な、なぜなのじゃ！？」

「……良いから、早く本題に入れ。俺も毎日、進展のないお前らの話を聞くほどヒマじゃないんだ」

秀吉は雄二の言葉に驚きの声をあげると理音はため息を吐く。

第61問

「……なるほど」

「どうかのう？」

秀吉は理音に今日の事を報告すると理音は考え込み、秀吉は心配そうな表情で理音に聞く。

「……いや、あの先輩なら、確かに言いそうだが」

「どうかしたのか？」

「秀吉から話を聞く限り、秀吉いらなくないか？」

理音はあまり、葵のために何もできていない秀吉を見て、隠す事なく直球を投げると、

「……何となくじゃが、ワシもそう思っておったのじゃ」

「ちょっと待て、秀吉、落ち込むな！？ 理音、お前ももう少し言葉を選べー！」

秀吉は自分の不甲斐なさを感じているようでため息を吐き、雄二は理音に言葉を選べと言う。

「ん。そうだな。言い過ぎたか。一先ずは本来、お前にやって貰おうとした事を自分からやってくれている先輩がいるんだ。そっちは任せておけば良い」

「それでは、ワシは何をすれば良いのじゃ？」

「今まで通りの本宮のフォローと自分の演技に集中する事」

「確かにな。秀吉は演技に集中しきれないんじゃないか？ 演劇部の公演を成功させる事で本宮にやればできると言う事を教えたのに秀吉が腑抜けた事やって、役をおろされる。最悪、公演が失敗ってなると終わりだしな」

理音と雄二は秀吉に葵だけに気を取られるなと言うと、

「う、うむ。それはわかっておるのじゃ」

秀吉は頷くがどこか心ここにあらずと言った印象が見える。

「おい。俺の話を聞いているか？」

「うむ。ちゃんと聞いているのじゃ」

「なら、お前のやる事はヒロインへの愛の告白シーンも相手が本宮だと思って練習しろ。迫真の演技じゃなくて良い。目の前に本宮がいるとしてお前の心をぶつけている」

「そ、それは少し恥ずかしくはないかのう？」

理音が秀吉にやるべき事を伝えると秀吉は顔を赤らめるが、

「理性で動こうとするな。お前のなかにある感情をぶつけないとあいつは動かないと思うぞ」

「本宮はぶつけられると吹っ飛んで行きそうな気もするけどな」

理音は秀吉から視線を逸らす事なく、くすりと笑い言つと雄二はため息を吐く。

「でも、まあ、お前はどこか引いてる部分もあるからな。それも良いんじゃないか？」

「そうかのう。うむ。頑張つて見るのじゃ」

雄二は秀吉に向かい頑張れと言つと秀吉は大きく頷き、

「秀吉、そんなお前にプレゼントをやるう」

「映画のペアチケットじゃな」

「週末、演技の参考にしたいからとでも言つて誘え」

理音は邪悪な笑みを浮かべて秀吉に葵をデートに誘えと言つ。

「貰つても良いのか？ 理音が姉上を誘えば良いではないのか？」

「俺と優子の場合はどうしても怜生がセットになるからな。映画は向かない」

「なるほどのう。それなら、遠慮なくいただくのじゃ」

秀吉は理音が何かを企んでいる事など気づかずに笑顔を見せる。

「……なあ、理音。お前、何を企んでいる？」

「別に何も企んではないない。ただ、もう1枚、あつたペアチケットは霧島にやっただがな」

「お前！？　なんて事をしてくれるんだ！？」

雄二は理音の様子に何を企んでいると聞くと理音からは雄二にとばつちりが行くようになってる。

第61問（後書き）

どうも、作者です。

お膳立てができた葵と秀吉のデート。秀吉は上手く葵を誘えるんでしょうか？

そして、雄二が翔子に捕まった映画は『恋と理性と幼なじみ』の映画の日と重なっています。

だから、本編で翔子は雄二の腕にきちんと抱きついていきます。

第62問

(……理音から、映画のチケットを貰ったのは良いのじゃが……渡せぬのじゃ)

秀吉は理音から映画のペアチケットを貰った翌日、葵をデートに誘おうとするが、邪魔が入ったりとタイミングが悪く渡せないように、教室でため息を吐いていると、

「秀吉、どうかしたの？」

「あ、明久！？ な、何もないのじゃ！？」

ため息を吐いている秀吉を見て明久が声をかけると秀吉は声を裏返して慌て、

「……あいつは演劇部のくせにどうしてああ言う時の対処はできないんだ？」

「さあな」

事情を知っている理音と雄二はため息を吐いている。

「それで、秀吉、ため息なんて吐いてどうかしたの？」

「な、何もないのじゃ！？」

明久は改めて秀吉に聞くと秀吉は慌てて何もないと言うが、

「秀吉、何か落ちたよ……映画のペアチケット？」

慌てたせいか、映画のチケットを落とし明久がチケットを拾うと、秀吉が『ペアチケット』を持っていると言う事に教室がざわめきだす。

「……まさか、自分達が誘って貰えると思ってたりはしないよな？」

「……確実に思ってるだろうな」

理音と雄二は教室の空気にため息を吐くと、

「ひ、秀吉、このチケットはどうしたの？」

「うむ。理音から貰ったのじゃ」

明久は『美少女秀吉』がペアチケットをどのように使うか気になり、まずはどうしたかと聞くと秀吉は理音から貰ったと言うと、

『総員、狙え!!』

「リオ、まさか、リオがボク達を裏切るなんてね」

『前田を生きて帰すな!!』

理音が秀吉をデートに誘ったと勘違いしたようでクラスメート達は理音に向けて殺意を向け、

「……死にたいヤツからかかってこい」

理音に撃退されて行く。

「……秀吉、ちゃんと答える。お前のせいで誰かが死ぬぞ」

「う、うむ。理音は怜生くんとは長時間の映画は見れないと言っている。演技の勉強に使ってくれと言ってくれたのじゃ」

雄二は教室で理音の手で起こなわれている虐殺風景にため息を吐き言つと秀吉は理音から貰った経緯を話すと、

「……それで、木下。誰を誘うつもりなのかしら？」

「……詳しい話を聞かせて貰えますか？」

瑞希と美波は秀吉が明久を誘うと勝手に勘違いして秀吉の肩をつかむ。

第62問（後書き）

どうも、作者です。

秀吉がペアチケットを持っている事で教室大騒ぎ。（爆笑）

秀吉『は』無事に葵をデートに誘えるんでしょうか？（悪笑）

第63問

「姫路、島田、い、いきなり、どうしたのじゃ？」

「ねえ。木下、そのチケットでまさかアキを誘う気じゃないわよね？」

「木下くん、抜け駆けはズルですよ」

秀吉は瑞希と美波の様子に顔をひきつらせると瑞希と美波は何を勘違いしているのか、無駄な殺意を垂れ流している。

「ま、待つのじゃ！？ なぜ、ワシが明久を誘わないといけないのじゃ！？」

「「えっ！？」」

「……なぜ、驚くのじゃ？」

秀吉が明久を誘うつもりはないと言うと瑞希と美波は驚きの声を上げると秀吉はため息を吐く。

「2人とも勘違いするな。秀吉は本宮を誘うんだ」

「ゆ、雄二！？」

「理音が本宮に演技を見せてやれって言ってな」

雄二はため息を吐きながら、理音が秀吉にチケットを渡した理由を

話すと、

「本来なら、舞台とかの方が良いんだろうがな。清涼祭前ではチケットも取れなくてな。映画のチケットにしたわけだ」

理音は積み上げた屍を見上げながら言い、その屍のなかには明久も混じっている。

「葵を？ …… それならそうと最初から言いなさいよ」

「…… お前らは少し人の話を聞く事を覚えろ。秀吉が話す前に詰め寄ったのは誰だ？」

「あはは」「」

美波は理音と雄二から秀吉が誰を映画に誘うか聞いてため息を吐くと理音は呆れたように言い、瑞希と美波は理音から目を逸らして笑うと、

「そ、それで葵ちゃんは誘えたんですか？」

「…… まだなのじゃ」

瑞希は自分が不利な状況を変えるために、秀吉に葵を誘えたかを聞くと秀吉は気まずそうに首を振る。

「何やってるのよ。映画に誘うだけでしょ。同性なんだから気軽に誘えば良いじゃない」

「ワシは男じゃ！？」

美波は相変わらず、秀吉を女の子扱いしており、ため息を吐くと秀吉は声を上げ、

「まあ、秀吉はどちらかと言えば誰かに誘われて動くタイプだからな」

雄二は秀吉は異性を誘うのになれていないと言う。

「う、うむ。恥ずかしながら、そうなのじゃ。何度か誘いに行っただけが、顔を見ると緊張してしまっただけ」

「それなら、メールで誘えば良いんじゃないの？」

「しかし、ワシは携帯電話を持っておらんのだ」

美波は秀吉にメールで葵を誘うように言うと秀吉は苦笑いを浮かべると、

「もう。……えーと、葵のアドレスは……」

美波は秀吉ではちがえないかと思っただけで秀吉が葵を映画に誘いたいと言う内容でメールを出す。

「島田、何をするのじゃ!？」

「あんたがさっさとしないからでしょ」

秀吉は美波の行動に驚きの声をあげるが美波は秀吉が悪いと言い切り、

「……男らしいな」

「そうだな」

理音と雄二は美波の行動を見て苦笑いを浮かべると、

「前田、坂本、何か言った？」

美波は2人を睨みつける。

第63問（後書き）

どうも、作者です。

美波が葵を誘いました。（苦笑）

恋に奥手な秀吉は葵からの返事を聞き、上手く彼女をエスコートで
きるのでしょうか？（悪笑）

第64問

『……それで、木下くんからデートに誘われたわけね?』

「えーと、前田くんが私が演劇部の手伝いをしてる事を知って木下くんに預けてくれたみたいです」

葵はお昼休みになり、いつものように1人でお弁当を食べようとしていたのだが、演劇部の女子部員に捕まり、一緒に弁当を広げると、どこから広がったかわからないが秀吉が葵を映画に誘った話は演劇部全員には広がっているようであるが、葵は秀吉に他意があるとは思っているせいか苦笑いを浮かべると、

『……本宮さんのこの反応を見るにやっぱり、木下くんは異性に見られてないわよ』

『第3の性別のハンデは大きいわね』

部員達は葵に聞こえないように秀吉との仲を心配する(たのしんでいる)。

『でもさ。木下くんと葵は2人で映画を観に行くのよね? それって、完全にデートでしょ?』

「違いますよ。木下くんは優しいから、私を気づかせてくれてるだけ、それにメールをくれたのは島田さんですし」

演劇部員は葵にデートだと思わせたいようで秀吉からのデートだと言っているが誘ったのは美波のため、葵はそんな事ないと困ったよ

うに笑うと演劇部員達は理音達Fクラスの面々が舞台を整えているのに自分から動かない秀吉ヘタレの事を考えて舌打ちをするが、

『えーと、それで、何を観るつもり？ 今なら……恋愛物で評判が良いのがあつたはずよ』

『そうね。恋愛物なら話の流れで告白の1つくらい』

不自然なくらいに『恋愛物』を薦めると、

「えーと、私、あまり、人混みが得意ではないので映画館みたいな……」

葵は人混みが苦手だからと言う理由で秀吉からの誘いを断ろうと思っているようであり、

『『……』』

葵の様子に演劇部員達は1度、固まる。

「えーと、どうかしましたか？」

『……本宮さん、断ったらダメよ。木下くんも前田くんも本宮さんのために映画のチケットまで用意してくれてるんだからね』

葵は演劇部員達が固まった意味がわからずに首を傾げると部員の1人が断ってはいけないと言うが、

「で、でも、私、演技の事はわかりませんし。観ても、木下くんと演技の話もできませんし、私なんかと行っても木下くんはつまらな

いでしょうし……」

『だから、木下くんが一緒にくるんでしょ。本宮さん、1人なら、今みたいに行かない。って言ったりするでしょ。演劇部を手伝って貰って、本宮さんは自分の意見を言うのが苦手なんだから誰かと少しでも、話をするようにしないとダメだよ』

葵は自分と行っても秀吉が楽しめないと言うが、演劇部員達は頭のために行くんだから、秀吉は気にするなと言い、

「で、ですけど」

『『『良いから行きなさい』』』

「は、はい!？」

葵は演劇部員達の勢いに慌てて頷く。

第65問

『木下、集中しな!! 身が入らないなら追い出すよ!!』

「うむ。わかっておるのじゃ」

演劇部の練習が始まると秀吉は葵にデートが断られないか心配なように練習に集中していないように見え、先輩部員から叱咤を受けている。

(木下くん、調子悪そう)

葵は秀吉の様子が今まで見た事がないくらい調子が悪いのは自分のせいだとは思っていないようで不安そうな表情をすると、

「……うむ」

秀吉は葵の不安そうな顔を見て気合いを入れるために自分の両頬を叩き、

「すまぬのじゃ。もう1度、頼むのじゃ」

真剣な表情をして練習に戻る。

「……秀吉、本当にあの娘の事、好きみたいね」

「なんだ? 信じてなかったのか?」

「仕方ないでしょ。あたし、あいつと恋愛話なんてした事なかった

し」

演劇部の練習を外から理音と優子が眺めていると、

『前田にえーと、木下の姉の方ね。そんなところに立ってないで入
つてきなよ』

理音達に気づいた先輩部員が2人を呼ぶ。

「えーと」

「いや、今日はこれを渡しにきただけだ」

『ん。もうできたの。ありがとう。助かるわ』

優子はいきなり呼ばれた事に少し気まずそうに笑うが理音は表情を
変える事なく懐から何か取り出すと先輩部員は受け取り、理音に礼
を言う。

「……ねえ。理音、それは何？」

「ん？ この間、演劇に使う小道具を作ってくれと言われてな」

「おかしなものじゃないでしょうね？」

優子はまた、理音がおかしなものを作ったのではないかと疑ってい
るようでジト目で見るが、

『心配しないで良いわよ。火薬とかおかしいものを頼んだわけじゃ
ないから』

先輩部員は苦笑いを浮かべる。

「それで先輩から見て、本宮は溶け込めそうですか？」

『あれ？ 前田が心配するんだ。意外ね』

理音は先輩部員に葵の事を聞くと先輩部員はくすりと笑った後、

『私にどれだけ人を見る目があるかはわからないけど、あの娘には才能はあると思うわ。だけど、前田や木下が心配してるように人付き合いがね。最近はずちの2年の娘達が気にかけてるけど馴染めて
いるかは微妙なところね』

葵はまだ馴染めていないと言う。

「そうか……」

『後は木下の頑張りしだいね。1番、夢に近いあいつがどれだけ真剣に夢に向き合っているか、身を持って示さないとね』

先輩部員はニヤリと笑うと、秀吉と葵の事を楽しんでいるように見える。

「……理音、この人に任せて大丈夫？」

「ああ。少なくとも秀吉に発破をかけるのは演劇の事がわからない俺達にはできない事だからな」

優子は先輩部員の表情に理音の耳元で大丈夫かと聞くと理音はくす

りと笑い問題ないと言い切る。

第66問

『今日はここまで、お疲れさまでした』

先輩部員の言葉で本日の練習が終了すると、

「本宮」

「は、はい!？」

秀吉が葵を呼ぶ。

『隊長、あれは本宮さんは木下くんを意識しているように見えますか?』

『……いや、木下は意識しているが、本宮は声をかけられた事に驚いているようにしか見えません』

そんな2人の様子を温かく見ている部員達はこそこそ話を始め出すと、

『あんた達も遊んでないで帰る。鍵が閉められないでしょ』

先輩部員はため息を吐きながら噂話をしている部員を部室から追い出す。

『でも、先輩だって気になりますよね』

『そうね。だけど、あの2人は周りが騒ぎすぎると上手くないかない

気がするわ。だいたい、あんた達も他人の事を心配するより、じぶの事を心配しなさい』

先輩部員は部員達の言葉を切り捨てると、

『木下、本宮、そろそろ、鍵を閉めるよ。早く部室から出て』

「うむ」

「は、はい」

先輩部員の呼びかけに秀吉と葵は顔を赤くして部室から出る。

『忘れ物はないね。それじゃあ、2人とも気を付けて帰るんだよ』

「は、はい。お疲れさまでした」

「うむ」

先輩部員は鍵を返すために職員室に向かい、

「本宮、家まで送るのじゃ」

「い、いえ、そんな毎日、送って貰うわけには!？」

秀吉はいつものように葵に送って行くと言うと葵はいつものように慌てて断るが、

「行くのじゃ」

「は、はい!？」

秀吉は葵の手をつかみ歩き出し、葵は秀吉の行動に声を裏返して返事をする、

『おつ、木下、手を握りに行つたぞ。ヘタレ、返上か?』

『2人とも真つ赤ね。あれで本宮さんも気づけば……ないね』

『ああ。ないな』

演劇部員達はしっかりと物陰から2人の様子を覗いており、

『しゝ、静かにして。行くわよ』

『『『『おお!』』』』

先輩部員の注意を聞く気すらなかったようで2人の後を追いかけて行こうとするが、

『……あんだ達は何をやってるのよ』

先輩部員に見つかり、追跡を諦める。

第67問

「……」

「……」

葵は秀吉に玄関まで手を引かれてきたのだが、上履きを履き替えた後、2人とも妙に恥ずかしくなったようで、2人の間には沈黙が続いているなか、

（……ワシは何をしてしまったのじゃ。本宮に了承も得ずに手、手を繋いでしまうとは……しかし、本宮の手は小さくて）

秀吉は葵の手を握った事にいろいろな考えが頭をよぎっては聞いて行くが、

（ち、違っのじゃ！？ 先に本宮に確認せねばいかんのじゃ）

葵に映画の事を確認する事を思い出して、邪念を振り払うように頭を振る。

「き、木下くん、どうかしましたか？」

「な、何でもないのじゃ……」

葵は秀吉の様子に何かあったかと聞くと秀吉は何もないと言った後、大きく息を吸い深呼吸をして、

「も、本宮、島田から、メールが行ったとは思っのじゃが……映画

はいつが都合が良いかのう？」

「は、はい。えーとですね……」

葵に映画デートの事を聞くと、葵はどう答えて良いかまもっていないように沈黙してしまう。

(……ダメなのかのう。しかし、理音の言う通りに行く事が前提で話をしたのじゃ。本宮の性格上、ここから、断られはしないはずじゃ)

黙ってしまう葵を見て、秀吉は事前に理音と打ち合わせをしたように大丈夫だと言い聞かせるようにしていると、

「あ、あの。本当に私を誘ってくれるんですか？ 私、映画を観ても木下くんの演技の参考になるような事は何も言えませんよ」

「な、何を言っておるのじゃ、ワシは本宮と映画に行きたいのじゃ……あつ!？」

葵が遠慮がちに言うと言秀吉は口を滑らせて葵と映画に行きたいと言う本音を葵に伝えた後、自分の言葉に気づき、秀吉の顔は真っ赤に染まって行く。

「き、木下くん？ そ、それって？ あ、あの……」

「こ、これはその……あの、なんて言ったら……」

葵は秀吉の言葉に恥ずかしくなったように顔を伏せると秀吉は慌てて何かを言おうとするが、言葉は上手く出てこなかったため、2人の間

にはしばし、沈黙が続くと、

「も、本宮、いきなり、すまんのじゃ。お、お主が理音の事を好いておるのはワシだって知っておるのじゃ。そ、それでも、ワシはお主が好きなのじゃ。だから、今度の休みにい、一緒に映画に行つて欲しいのじゃ」

秀吉は沈黙に耐えきれなくなったようで、慌ててしどろもどろになりながらも、今度は葵を自分の言葉でデートに誘う。

「き、木下くん!？」

「う、うむ。答えは直ぐじゃなくても良いのじゃ!!」

葵は秀吉の告白に顔を真っ赤にすると秀吉は自分でもどついたら良いのかわからないように葵を置いて駆け出す。

第67問（後書き）

どうも、作者です。

映画を前に秀吉のグダグダな告白はみなさんにどう映ったでしょう？

秀吉は事故っばいですが葵に自らの想いを打ち明けました。

秀吉の想いに葵は何か感じたのでしょうか？（悪笑）

第68問

(……あれ？ 今、何があったのかな？)

葵は秀吉の背中を見送りながらも、彼女の頭は秀吉の告白を処理仕切れていないようで顔を真っ赤にしたまま呆然としていると、

「やつほー、葵ちゃん、こんなところで何をしてるの？」

葵を見かけた愛子が駆け寄ってくる。

「く、工藤さん!？」

「あれ？ そんなに慌ててどうかした……………優子の弟くんに告白でもされた？」

「そ、そ、そ、そんな事はなひれ……………」

葵は愛子の登場に驚きの声をあげると愛子は葵の様子に彼女をからかうように冗談を言つとその冗談は事実であり、葵は慌てて舌を噛み涙目になる。

「あちゃー、冗談で言ったのに。まさか、本当に告白したんだ」

「……………」

愛子は葵の様子に苦笑いを浮かべると葵は改めて、秀吉に告白された事を思い出したようで彼女の顔はゆでだこのように真っ赤になり、煙を上げだし、

「ちょっと、葵ちゃん！？こ、これはどうすれば良いのよ！？」

愛子は葵の様子にどうしたら良いかわからずに慌てる。

「……すみません。ご迷惑をおかけしました」

「うん。まあ、気にしないでよ。友達なんだしさ」

「……」

愛子は近くの喫茶店に葵を引きずり込むと葵は落ち着いたようで愛子に謝ると愛子は気にしないで良いと言うが、葵は愛子の言葉に戸惑ったような表情をする。

「どうかした？」

「あ、あの。今、なんて？」

「うーん。そう言う事か。ボクは葵ちゃんを友達だと思ってるよ。それとも、ボクが友達なんて不満？」

愛子は理音達から葵のコンプレックスを聞いていたようで笑顔を見せて自分は葵の友達だと言うと、

「そ、そんな事はないです！？ 工藤さんは私と違って明るくて可愛くてそれに、それに」

「あはは。慌てないでよ」

葵は自分が愛子の友達だと言って良いかわからないように慌てていると愛子は苦笑いを浮かべると、

「それで、葵ちゃんは優子の弟くんの告白はどうするつもり？」

恋愛話に興味があるようで目を輝かせて葵に聞く。

「そ、それは……私」

「葵ちゃんって、告白された時って嬉しかった？」

葵は秀吉からの告白にどうして良いかわからないように顔を伏せると愛子は素直に嬉しかったかどうかを聞く。

「それは、嬉しかったんだと思います。私、暗いし、取り柄なんか何もないし、それなのに、私の事を好きだって言って貰えましたし」

「じゃあ、好きなんですよ。難しく考えなくても良いんじゃないかな？」

「でも、私みたいなのがそばに居たら木下くんに迷惑がかかります」

葵は自分のような人間が居たら秀吉の迷惑になると言うつと、

「ねえ。葵ちゃん、ボクもね。葵ちゃんの書いたお話、何冊か読ませて貰ったんだけどね。葵ちゃんの書く女の子って、誰かを好きになつて変わって行く女の子が多いって思ったんだ。これって、葵ちゃんの『望み』^{ほん}なんじゃないの？ 自分も変わりたいって想いが葵ちゃんの書いた作品には溢れてるってボクは思っただよね」

「それは……」

「図星でしょ？」

「はい……」

愛子は葵の書いた小説を読んで感じた事を葵に投げかけると葵はうつむき小さく返事をする。

「なら、葵ちゃんも変わらないと、葵ちゃんの書く女の子達は向かって行ってるよ。葵ちゃんが引いてちゃいけないと思うんだよね」

「……そうですね」

「どう。何か友達として良い事言えたかな？」

「は、はい。ありがとうございます。工藤さ……！？」

葵は愛子に頭を下げると愛子は葵の言葉を止めると、

「葵ちゃん、工藤さんって呼ぶの禁止。ボクも今から葵って呼ぶから、ボクの事は愛子って呼んでよ」

「そ、そんな」

「ほら、呼んで」

「あ、愛子」

「うん。良く出来ました」

愛子は葵に自分の名前を呼ばせると笑顔を見せる。

第68問（後書き）

どうも、作者です。

秀吉の告白に葵はオーバーヒート？偶然居合わせた愛子は大変だったでしょう。（苦笑）

瑞希や美波と違って自分の考えを押し付けない愛子って、バカテスじゃ、常識人だと思います。

変わりたい自分はすでに葵の作品なかにいましたが、愛子の言葉に葵は勇気を出して踏み出せるのでしょうか？

第69問（前書き）

連続投稿です。

第69問

「……」

「……本宮、お前は何かしたいんだ？」

「ひゃう!？」

葵は理音に話があつたのか、理音の家の玄関の前でインターホンを鳴らそうか悩んでいると葵の背後から、理音の声が聞こえ、葵はびっくりと体を震わせる。

「……何かあつたか？」

「い、いえ」

「まあ、立ち話も何だしな。中に入れ」

葵が振り返ると右手に買い物袋を持った理音と理音の後ろに隠れている怜生が立っており、理音は葵が訪ねてきた理由に心当たりはないようで首を傾げながらも家の鍵を開けて葵に家に入るように言い、

「お、お邪魔します」

葵は遠慮がちに家に上がり、居間のソファに座ると、

「どうした？ 珍しい物でもあつたか？」

「い、いえ、私、男の子の家に上がるのが久しぶりなので」

「だろうな。俺が留学してからはアキの家にも行ってなかっただろうしな」

理音は落ち着かない様子の葵の前にオレンジジュースを置き、自分は葵の前に腰掛ける。

「は、はい」

「それで、何かあったか？」

葵は緊張しているようで理音から出されたオレンジジュースに口をつける。理音は葵が訪ねてきた理由を聞く。

「あ、あの……私、木下くんから、告白されたんです」

「そうか。それで」

「……」

葵は理音が何か反応してくれる事を少し期待しながらも秀吉に告白された事を報告するが、理音の顔が嫉妬で歪む事があるわけがなく、葵は肩を落とす。

「それだけか？」

「あ、あの……私はどうしたら良いと思います？」

「……本宮、それを俺に聞くのは筋違いじゃないか？」

理音は葵にそれだけかと聞くと葵は理音に何か言っただけそう表
情をするが、理音はそんな葵の様子にため息を吐くと、

「答えは自分で探すんだ。俺は男として何も言っただけやる事はないぞ」

「……そうですね」

「ただ、『友達や仲間』としてなら、かけてやる言葉くらいはある」

葵に抱えたままの想いを吐き出させようとする。

「……前田くん、それって」

「なんだ？　俺がお前のガキの頃からの気持ちに気づいてなかった
とでも思っていたか？」

「そうですね……前田くんなら、気づいててもおかしくないです
よね」

理音の言葉に葵はすでに自分の理音に向けた想いがバレている事に
気づいて顔を伏せると、

「……前田くんは私の初恋です。最初は怖かったけど、こんな私に
も優しく、前田くんのそばに居れば私は変わるんじゃないか？
って思っていました。でも、前田くんはすぐに外国に行ってしまった
で、私の時間は止まったって思っていました」

「……」

葵はずっと胸に秘めていた想いを話し出し、理音は何も言わずに葵

の言葉を聞いている。

「……離れている時間が有って、前田くんに再会した時、私はまた、昔、思い描いた自分になれるかな？　って思いました。だけど、結局、私は自分では何もしないで立ち止まったままだったんです……前田くんや吉井くんが1人だと思いついて私の手を引っ張ってくれようとしているのに自分はその手をつかむ事から逃げてたんです」

「……そうだな」

葵はよほどの覚悟を決めていたようでまっすぐに理音を見ると理音は彼女から視線を逸らす事なく頷くと、

「そんなイヤな女の子でも、前田くんや吉井くん、木下くんは私に手を伸ばしてくれました。だから、変わりたいんです。あの日、あなたに言えなかった事を言う事で………あなたのなかに木下さんがいる事もわかってます。だけど聞いて欲しいんです。前田くん、ずっと、あなたが好きでした」

理音に向けて過去に言えなかった想いを打ち明ける。

第69問（後書き）

どうも、作者です。

葵は先に進むために理音に告白をしました。

理音はそんな葵に何を言うんでしょうか？

そして、逃げ出した秀吉は？（爆笑）
ヘタレ

第70問（前書き）

3 連続投稿。

第70問

「……悪いな。俺は優子が大切だから、お前の気持ちには答えられない」

「……はい」

理音は葵の告白に優子本人にも言うてはいない自分の想いを話すと葵は理解していたはずだが、自分の初恋が終わりを告げた事に肩を落とすと、

「……お兄ちゃん、お姉ちゃんを泣かせたらダメです」

「違うよ。怜生くん、前田くんは悪くないよ。無理を言ったのは私なの」

話の内容は理解していないようで落ち込む葵を見て怜生は理音を怒るように言うが葵は理音と怜生の優しさが嬉しかったようで怜生を抱きしめてぎこちない笑顔で笑う。

「……お姉ちゃん？ 大丈夫ですか？」

「大丈夫……とは言えないけど、お姉ちゃんが望んだ事だから、自分の弱さを前田くんのせいにしなためにね。怜生くんももう少ししたら、わかるから、お兄ちゃんを責めちゃダメだよ」

「……わかりました」

怜生は葵の表情に心配そうに彼女の顔を見上げると葵は怜生を諭す

ように言つと怜生は大きく頷き、

「……それで、前に進めそうか？」

「そうですね。少しだけ、時間はかかると思いますけど、前に進め
ると思います。立ち止まっても、『友達』の前田くんが背中を押し
てくれるから、吉井くんや木下くんが手を伸ばしてくれるから」

「そうか……」

理音は彼なりに罪悪感があるようで少し遠慮がちに言つと葵は大丈
夫だと言ひ、理音はその言葉に頷くと、

「なら、『友達』の俺としての意見だ。秀吉はお前の事が本当に好
きだぞ。俺もあいつと会つてあまり日は長くはないが、女の事で素
で慌てるあいつは見た事がない。演劇部だから割とポーカーフエイ
スは得意なはずなのにな。まあ、性別が秀吉だからかも知れないし、
ヘタレな部分があるから、頼りなく見える事もあるけどな。あいつ
のお前への想いは本物だ」

「……はい。私もそう思います。そうじゃないとあんなにドキドキ
しないと思いますから」

理音は葵と秀吉両方の友達として葵にアドバイスをすると葵は頷き、

「後は、１人で考えて見ます」

「ああ……本宮、頑張れよ」

「はい」

理音に頭を下げると急いで玄関に歩き出すが、

「ふぎや!？」

足を滑らせたようで居間の外からは大きな音が響く。

「……怜生、本宮を送ってくるから、準備しろ」

「……はい」

理音はその音に慌てる事なく立ち上がると怜生に葵を送りに行く準備をするように言い、自分は救急箱を持って居間を出て行く。

第70問（後書き）

どうも、作者です。

葵の告白にしっかりと自分の想いを打ち明けた理音。

皆さんの目にはどう映ったでしょうか？

作者は男なので葵の告白は願望であり、女性から見れば有り得ないと思われるかもしれませんが、葵を書こうと決めるにあたり、ここだけはゆずってはいけないシーンだとも考えています。

前を向き、変わりたいと思った葵と逃げ出した秀吉？

このままだと、秀吉は尻に敷かれる気がしてなりません。（苦笑）

第71問

優子は帰ってきた秀吉を見て、ある程度は葵と何かあったと気づいたようで、秀吉に葵との事を聞くと秀吉は葵に告白したものの返事から逃げ出してきたと言い、

「……それで、逃げ出したの？ わかってたけど、秀吉、あんた、ヘタレね」

「うるさいのじゃ！？ ワシだって好きで逃げてきたわけじゃ！？ あ、姉上、ワシの腕はそちらには曲がらぬのじゃ！？ すまぬのじゃ！？ ワシが悪かったのじゃ！？」

優子は秀吉の情けなさのために息を吐くと秀吉は何か反論しようとするが、優子得意の関節技をかけられ、優子に泣きながら謝る。

「当たり前よ。あたしが悪いわけないでしょ」

「ううう。自分から聞いておいて理不尽なのじゃ」

優子は謝る秀吉を放すと自分は悪くないと言い切り、秀吉は納得ができないとため息を吐く。

「まあ、それでも、告白してきたんだから、あんたとしちゃ、上出来よね」

「姉上、本当にそう思つかのう」

優子は逃げ出したとは言え、今まで見た事のない秀吉の行動に苦笑

いを浮かべると秀吉は嬉しそうに聞き返す。

「だからと言って、まだまだよ。男なら、振られるにしてもキチンと返事くらい聞いてきなさいよ!!」

「姉上、待つじゃ!! なぜ、姉上にはワシが振られる選択しかないのじゃ!？」

優子は秀吉に調子にのるなと言いたげに秀吉の腕をつかむと秀吉は納得できずに声を上げると、

「決まってるでしょ!! 女装して喜んでいる変態を女の子が好きになると思う? …… 自分より、男の子に告白されるのが彼氏で彼女の立場があると思う? まったく、今は彼氏がいるから、問題ないけど、姉より、男の子から告白される弟ってなんなのよ?」

「姉上、待つじゃ!?! 今は清涼祭が近いゆえ多いただけなのじゃ!?! だいたい、それはワシのせいではないのじゃ!?!」

優子は未だに男子生徒が秀吉に告白するのが許せないように秀吉の腕を締め上げると秀吉は自分のせいではないと叫ぶが、

「あんだ、男だ。男だ。って言うなら、男子生徒から告白されない男にならなさいよね」

「り、理不尽なのじゃ!?!」

優子は秀吉の言葉にさらに熱くなり、近隣には秀吉の悲鳴が響く。

第72問

(……顔を会わせづらいのじゃ)

秀吉はいつもは葵を迎えにBクラスへ行くのだが、グダグダな告白のせいか足が思うように進まないようである。

「秀吉、お前は何をしているんだ？」

「理音、いや、何というかのう」

「本宮にグダグダな告白をしたから、迎えに行きづらいのはわかるがさっさと行け」

理音はそんな秀吉の様子に声をかけるが秀吉ははつきりしないため、理音は深いため息を吐く。

「な、な、なぜ、それを知っておるのじゃ！？ 姉上じゃな！？ ひどいのじゃ、誰にも言わぬと言っておったのに」

「……秀吉、あんた、あたしを疑ってるわけ？」

「優子、落ち着きなよ」

秀吉は自分が葵に告白した事を知っているのは姉の優子だけだと思っ
ているようで理音にバレているのが恥ずかしいのか顔を真っ赤に
して優子を責めるように言った時、優子と愛子が教室に顔を出し、
優子は秀吉の言葉を聞いて額に青筋を浮かべながら秀吉の肩をつか
み、愛子は優子と秀吉の様子に苦笑いを浮かべる。

「秀吉、勘違いするな。俺は工藤から聞いた」

「うん。ボクが葵から弟くんから告白されたって相談受けたからね」

理音は葵本人から聞いたとは言わずに愛子に聞いたと言うと愛子は本当に理音に連絡していたようで苦笑いを浮かべたまま、秀吉に言う、

「な、なぜなのじゃ!？」

「……秀吉、そんな事を言うより先にあたしへの謝罪はないわけ？」

「あ、姉上、す、すまぬのじゃ!？　ワシが悪かったのじゃ!！」

「秀吉、知ってる？　謝つてすむなら警察はいらないのよ」

秀吉は愛子から聞かされた言葉に声を上げるが優子は先に自分への謝罪が先だと言い、秀吉に関節技をかけ始め、教室には秀吉の叫び声が響く。

「……ねえ。前田くん、優子を止めなくて良いの？」

「別に良いだろ。それより、昨日も聞いたが、工藤が本宮と仲良くなつたと言うのは意外だな」

「あれ？　それって、ボクじゃ、不満って事？」

理音は葵と愛子が仲良くなつた事に首を傾げると愛子は少し不満げ

な顔をする。

「おかしい意味じゃない。先に瑞希と仲が良くなると思ってたからな。お前とじゃ……乙女チックな少女マ……」

「ストップ!? 前田くん、おかしい事を言わないで!」

理音はおかしな意味ではないと言うと葵と愛子の共通点を探しだし、口に出そうとすると愛子は慌てて理音の口を塞ぎ、

「なるほど、結構な共通点だったな」

「……前田くん」

「キャラ作りも大変だな」

理音は表情を変える事なく愛子に言う。愛子は苦笑いを浮かべる。

第73問

「……おい。本宮、掃除の邪魔だ」

「は、はい！？ ご、ごめんなさい。根本代表！？ ……」

恭二は授業が終わり、いつもなら秀吉や他のクラスの演劇部が迎えにくるはずの葵が教室に残っているのも見て邪魔だと言うと葵は慌てて席を立とうとするが慌てたため、足を机にぶつけて涙目になる。

「……お前は何がやりたいんだ？」

「ご、ごめんなさい。お掃除の邪魔になって……あれ？ 根本代表だけですか？」

恭二は葵の様子にため息を吐き、葵は慌てて恭二に頭を下げるが何か違和感があったようで恐る恐る頭を上げると教室の掃除は恭二一人である。

「ああ」

「どうしてですか？」

恭二は葵の言葉に不機嫌そうに頷くと葵は代表の恭二が一人で掃除をしている意味がわからずにキョトンとした表情で聞き返すと、

「あ？ 別にお前に関係ないだろ」

「す、すいません。で、出すぎたことを！？」

恭二は睨みを効かせて言う。葵はいじめられっこ属性を全開にして、恭二に何度も頭を下げた後、掃除用具を持ってくる。

「……本宮、お前は何がしたいんだ？」

「えーと、私に掃除を代われって事じゃないんですか？」

恭二は葵の様子に頭を押さえてため息を吐くと、葵は少し怯えた様子で答える。

「誰もそんな事を言っていないだろ。お前は部活があるんだ。さっさと行け」

「で、でも、一人で掃除は大変です」

恭二は葵の様子に調子が狂うと言いたげに葵を追い払うように手を振るが、葵は出て行く事も出来ないようであり、

「……勝手にしろ」

恭二は葵に関わるのが面倒になってきたようで掃除を再開させると、葵は恭二から少し距離を取りながらも掃除を手伝いしばらくした時、

『あれ？ 葵、まだいたの？ 部活いくよ』

「そ、掃除があるので」

「本宮、もう良いから行け」

他のクラスの演劇部員がBクラスの教室に顔を出し、葵を呼ぶと葵は掃除を続けようとするが、恭二はさっさと行けと葵を追い払うように再び、手を振る。

「で、でも」

「お前は掃除当番でもないだろ……もう良い。助かった」

葵は1人で掃除をするのが大変だと言うが恭二は葵に背を向けながら、葵に礼を言い、

「はい……」

『葵、先に行ってるよ。根本くんに襲われないようにね。葵には木下くんがいるんだから、根本くんもね』

葵は何か言いたげに返事をするとその姿に演劇部員は何かを感じたようで葵に先に行くと行って歩き出す。

「あ、あの。根本代表。根本代表は確かに卑怯な事をしたんだと思いますけど、代表としては間違ってるじゃないと私は思います」

「……本宮、お前は何を言いたいんだ？」

「え、えーと、な、なんて言ったら良いか。わ、わからないんですけど」

葵は理音達と関わりだし、自分と恭二にある変化を感じとっているのか、恭二に試召戦争での事は間違ってるじゃないと言うと恭二は意味がわからないと眉間にシワを寄せると葵はビクツと体を震わせて恭二

から距離を取る。

「……本宮、お前、バカだろ。おかしい勘違いしてないで、さっさと行け。邪魔だ」

「は、はい」

恭二はもう一度、葵に部活に行けと言うと葵は恭二に頭を深く下げた後、カバンを持って距離を出て行き、

「……つたく、本宮と言い、前田と言い。何なんだよ」

恭二は不機嫌そうに舌打ちをするが少しだけ口元が優しく緩む。

第73問（後書き）

どうも、作者です。

秀吉が煮え切らないなか、葵は葵で部活から若干逃げている。

……進まないな。この2人。（苦笑）

葵と恭二の関係って、何なんでしょうか？

理音とつながったからの恭二の変化。

4巻はどうなるんだ？と改めて思います。

まあ、書き始めた時は書くつもりがなかったからなあ。（苦笑）

第74問

『それじゃあ、今日の練習は終わりよ。木下、本宮、明日も今日みたいに気の抜けたような事をしたら、清涼祭まで出禁にするからね
！！』

「う、うむ。気をつけるのじゃ」

「は、はい。申し訳ありません」

演劇部の練習の終わりに先輩部員は秀吉と葵の不調に気づいていた
ようで2人に向かい言つと、2人は申し訳なさそうに先輩部員に頭
を下げるが、

『わかつてるなら、さっさと切り替える。木下、あんたは役者なの。
あんたがおかしな演技をしてると見る人も楽しめないし、舞台もぐ
ちゃぐちゃになる。それくらいは理解しなさい。本宮、あんたもだ
よ。脚本は役者に取って心臓なの。そして脚本を書いてるあんたの
言葉は血液、血液が止まったら、舞台は止まるわよ。それくらい、
理解しなさい』

先輩部員は秀吉と葵を叱咤すると、帰る準備を始め出す。

「お互い、怒られてしまったのう」

「そうですね」

秀吉は葵から視線を逸らしながら苦笑いを浮かべて言つと葵も秀吉
から視線を逸らしたまま頷き、

「そ、それでは帰るとするかろう」

「は、はい!？」

秀吉は断られないかと心配しながらも葵に声をかけると葵は声を裏返して返事をする。

『あれは進展が有ったと見ていいか?』

『まだよ。前田さんと工藤さんに聞いたんだけど、木下くんは勢いで告白したけど、その場から逃げ出したみたいよ』

『……なるほど、それなら、今日は告白の返事が聞けるわけだな』

『まったく、昨日、後をつけられなかった事が悔やまれるわ』

葵と秀吉の様子に演劇部員は集まり、こそこそ話を始め出し、

『……あんた達もこりないね』

先輩部員はその様子にため息を吐くと、

『あの2人も今日は全然だったけど、あんた達もだよ。2人の事が気になるのもわかるけど、仲間なら見守ってあげなさい』

演劇部員達に注意をするが、

『わかってますよ。私達はちゃんと見守るつもりです!-!』

『そうです。ただ、2人をからかおうなんて思ってません!!』

『……そう言うなら、デジカメや録音用のレコーダーは置いていきなさい』

演劇部員達は今日も葵と秀吉を尾行するつもりのように先輩部員はため息を吐く。

『何を言ってるんですか!! 本物の告白とその返事、私達、演劇部員には素晴らしい教材ですよ。2人ならわかってくれるはずです!!』

『……わかるわけないわよ。あんた達、おふざけが過ぎるから居残り、舞台の雑巾がけをしなさい。当然、あたしが監督をするわ』

先輩部員は部員達の悪のりに頭を押さえると雑巾がけを言い渡す。

第74問（後書き）

どうも、作者です。

作者は演劇部員がお気に入りです。（爆笑）

最初はここまでキャラが立ってなかったんだけどなあ。（苦笑）

まあ、葵と秀吉を応援してくれてると思いますですがベクトルは理音や愛子とは別方向です。

2人で帰路についた葵と秀吉。

告白の返事は？（悪笑）

最終問題

「……」

葵と秀吉は2人で並んで歩いているが、お互い何を話して良いのかわからないように沈黙が続いている。

「も、本宮、あの」

「は、はい!？」

秀吉は沈黙に耐えきれなくなったように葵に声をかけると葵は声を裏返すが、

「……」

そこから、先が続かず、沈黙が流れた時、

「……お前らは何がしたいんだ？」

「理音!？」

「前田くん!？」

2人の姿を見かけた理音がため息を吐きながらツツコミ、理音の登場に葵と秀吉は驚きの声をあげる。

「り、理音!？ なぜ、お主がいるのじゃ!？」

「なぜ？　と言われてもな。普通に買い物途中だ」

「……こんにちは」

秀吉は理音の登場に慌てて声をあげるが理音は無表情なまま右手に持ったレジ袋を見せると怜生が理音の後ろから顔を出して頭を下げる。

「秀吉、本宮、いちゃつくならいちゃつくではっきりしろ。今のお前らは正直つとつしい」

「いきなり、何を言うのじゃ!？」

「そ、そうです」

理音ははっきりとしない2人に向かい言々と秀吉と葵は顔を真っ赤にして声をあげるが、

「「あ!？　……」」

お互いが同じ反応をしたためか、顔を見合わせた後に恥ずかしくなったように視線を逸らす。

「……俺と怜生は帰るからな」

「……さようなら」

理音は2人の反応にため息を吐くと怜生の手を引き、歩き出し、

「「……」」

2人の間には再び、沈黙が訪れようとするが、

「も、本宮、き、昨日のへ、返事を聞かせて欲しいのじゃ」

「……あの。木下くん、本当に私で良いんですか？ 私、暗いし、かわいくもないし、気の利いた話だってできないですよ」

秀吉は意を決したようで顔を真っ赤にしたまま、葵に告白の返事を聞かせて欲しいと言うと葵は不安そうな表情で聞き返す。

「な、何を言っておるのじゃ！！ 本宮が良いのじゃ！！」

「き、木下くん……」

秀吉は顔を真っ赤にしたまま、叫ぶように言うと葵は耳まで真っ赤にし、秀吉から視線を逸らすと、

「あ、あの。映画何ですけど、い、今からでも良いですか？」

「……そ、それはもちろんじゃ」

「そ、それではお願いします」

葵は秀吉に返事の代わりなのか、秀吉からの映画デートを受けると言う秀吉は一瞬、何があったかわからなかったようだが、すぐに理解したようで慌てて頷き、葵は秀吉の返事に恥ずかしそうに秀吉の顔を見上げる。

「う、うむ。それでは行くのじゃ」

「は、はい」

秀吉は葵の顔を見て嬉しそうに言つと葵の手を握り、2人で映画館へ向かい歩き始めると、

「あ、あの。木下くん」

「手、手を握るのはまずかったかのう？」

葵が秀吉を呼び、秀吉は失敗したかと思ったのか慌てて手を放すが、

「ち、違います！？ あ、あの。わ、忘れてしまつとなんなので、声を聞きたくなつた時の……」

「そ、そうじゃな。しかし、困つたのじゃ、ワシは携帯を持ってないのじゃ」

葵は手の事ではなく、秀吉に携帯電話の番号を聞くが、秀吉は今まで必要ないと思つていた携帯電話を持っていない事を後悔するように言つ。

「そ、それなら、今度のお休みにふ、2人で見に行きませんか？」

「う、うむ。よろしく頼むのじゃ」

葵は勇気を振り絞つて秀吉に2回目のデートに誘つと、

「そ、それでは、行くのじゃ。あ、あまり、遅くなると本宮の親御さんにも迷惑をかけてしまうしのう」

「は、はい」

秀吉は大きく頷き、再度、葵の手を握り、2人で映画館に向かい歩き出す。

最終問題（後書き）

完結までお付き合いいただきありがとうございました。

なんか、ハンパな終わり方みたいな気がしますですが皆さんにはどう映ったでしょう？

前に進むために勇気を振り絞った葵と何となく流されている秀吉。

この2人はどう進んで行くのでしょうか？

宣伝？

本編である『サドで邪悪な召喚獣』の清涼祭編が終わったら、葵も本編に合流させようと考えています。

ですから、この煮え切らない2人の行く末は本編でお楽しみください。

まあ、後は活動報告に後日談を書くかもしれません。（悪笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741o/>

本と勇気と演劇部

2011年5月24日00時53分発行